

ロシア語史における一肢文の生成過程について

石田 修一

序

山口巖『類型学序説』は、類型学的な視点でロシア語史を取り扱う中で、形容詞述語や名詞述語の振る舞い方、あるいはまた非人称文や不定法文や不定人称文の発達を例証として、この言語では主語からの「述語の相対的独立性の強化」傾向が増大してきた点について論じている¹。すなわち、ロシア語史においては、先ず第一に、形容詞の生成途上に、真の形容詞形成に向かう方向に加えて、形容詞に向かうのではなく活格言語の状態動詞に近似した状態動詞化を進行させていくものがあること、すなわち述語性の強化に向かう短語尾（名詞型）形容詞の発達があること、この種の述語性の強化がさらに進行して主語との隔絶化が起ると、それが今度は、いわゆる述語副詞あるいは状態範疇 (категория сосоотояния) の発達に繋がること、第二に、名詞述語の場合も形容詞述語の場合と同じく、*быти* 動詞 (動詞) の人称変化の消失、したがって連辞の崩壊とともに益々主語との関係を希薄化して述語性を強化していくこと、第三に、非人称文の発達があるが、ロシア語史における非人称文は形容詞短語尾あるいは受動過去分詞に繋がる述語副詞型文型に加えて、非人称動詞や他動詞の非人称用法、あるいはまた再帰動詞から派生する動詞型文型等、いくつかのルートを経て形成されてきたが、これら文型は全て不随意的な行為・状態を表す点で共通であること、またこれら非人称文の主成分（述語＝陳述核）を補完する第二成分たる与格要素があるときはその与格が表す対象にとって不随意的な行為・状態であることを表すこと、第四に、不定法文の広範な発達が見られるが、この文型が表す法、すなわち様態性 (modality) も同様に、不随意的な行為・状態を表す点で共通性を持つこと、一般に「様態性というのは、もともと主体の随意性、自発性を制限するもの」²であること、が指摘されている。すなわち状態範疇の発達や第三、第四の傾向について別言すれば、不随意行為・状態文型の分離、独立過程の大規模な進行であり、この大規模な進行を可能にした基底に「述語の相対的独立化」傾向一般があること、の指摘である。また同氏は、これらの傾向が同じスラヴ語に属するチェコ、ボ

¹ 山口巖『類型学序説 ロシア・ソビエト言語研究の貢献』京都大学学術出版会 1995、p.139-165

² 同著 p.156

ーランド語が辿った路線とは逆の路線であり、活格型、能格型言語の類型特徴に接近したものとなっているが、これは基層の影響、あるいは文化の性格に起因するかもしれないことを示唆していて、興味深い。

本稿は、以上の諸点を踏まえ、かつ以上を支持する立場から、ロシア語史における文種パラダイムの中で一肢文パラダイム（呼名文を除く）が拡張していく過程について記述を試みたものである。

I. いわゆる一肢文の原点と生成過程について

ロシア語史の場合、一肢文（односоставное предложение）とは、文の主成分たる主語と述語の何れか一方だけから成る文であるが、古文において一肢文として挙げるべきは、定人称文（определенно-личные предложения）、不定人称文（неопределенно-личные предл.）、無人称文（非人称文 безличные предл.）、呼名文（номинативные предл.）であり、このうち前三者は述語だけから成る文、すなわち無主語述語文である。なお、現代語に見られる普遍人称文（обобщенноличные предл.）が機能化してくるのは概ね、十七世紀以後であり、したがって後発的にのみ現れてくる文種であり、これは定人称文、不定人称文という一肢人称文（無主語述語文）一般の分化過程の中で連続的に機能化して来たと思われる。しかし、一肢文の生成過程について必ずしもロシア語史家の間で統一見解がある訳ではない。

ゲオルギエヴァによれば、かつてロシア語史家の間では、一肢文あるいは二肢文何れが構文法の原点か、という点が問題視されて来たという。例えばブスラーエフは、文と論理的判断を同一視する観点から文一般に二肢性を見る。そのため、彼は現実に存在する一肢文は主語の脱落形式と考え、例えば *Светаг. Думагся.* のような文では、「動詞人称語尾の中に隠れた」主語を見るのに対して、ポポフとその弟子ポテブニャは、それとは正反対に一肢文を最古の文型と見なし、*Светаг. Пожар!* 等の文に現実の直接的反映を見る。一方、シャフマトフは、こうした問題そのものについては触れず、一肢文の場合は言語表現素材の上で一成分中に主語と述語を組み合わせたものと見なし、古今の文構造組織一般に一肢文、二肢文何れの存在も認める、というように論じたという³。

この種の議論の価値性についてはいささか疑念があるが、この議論に加わるとすれば、内容類型学が到達している仮説に従って、人類史における言語が概ね（類別型）→活格型→能格型→主格型という変遷過程を辿って来たことを前提として、二肢文構造が原点

³ В. Л. Георгиева, *История синтаксических явлений русского языка*, Просвещение, 1968, стр.8-9

であると考えることができる。何故ならば、活格言語においては二肢文構造が特徴的であるからである。例えば、クリモフは、その著「活格構造言語の類型学」において、次のように書いた：「文の構成組織の二つの中心（主成分）たる主語と述語の存在を前提とする文の二肢文構造が、活格言語にとっても特徴的であることは疑うべくもない。同時に、(гром) гремит 「(雷が) 鳴る」、(дождь) идет 「(雨が) 降る」、светает 「(夜が) 明ける」等の無主語文は文類型の周辺にある」⁴。あるいはまた、「ここでも文類型の輪郭を形成するのは、文を構成する二つの中心たる主語と述語を含む述語的シンタグマである。述語が完全に自立的であるのに対して、主語は述語への従属性（特に述語の格形支配が考えられる）を示している」⁵。このように述語が優勢、支配的な地位を確保しているため、主語等を述語に抱合する形式が多発すること、したがってまた、文成分間の統語関係を表すための文の形態モデルとして、統語関係を述語に集中配置する動詞型が最古の文モデルであり、それを原点としてやがて名詞の格形式の発達程度に応じて述語、名詞主語両者に統語関係の指標を配する混合型、さらに名詞主語にだけ統語関係の指標を集中する名詞型へと発展する傾向が存することは、クリモフが同著を含めて諸処で論じているところである。クリモフのいう二肢性 (двусоставность) を基本とする中での述語の優勢支配性、動詞型、抱合形式の多発が原初の姿であるとするれば、文献出現以後のロシア語史に現れる定人称文の二肢人称文に対する優勢傾向も、こうした古層の残滓を留めるものと解することができる。尤も、古スラヴ語における定人称文の優勢性についても、過去においてヴァイアン (A. Vaillant)、ロシ (J. Loš)、マトヴェーエヴァ・イサーエヴァ (Л. В. Матвеева-Исаева) 等多くの研究者が論じたところであり⁶、また印欧語についても、メイエが述べているように、「印欧語の動詞形は、数と同様、代名詞の付加なく人称を表す。代名詞があるところでは、それは自立的な語の意義を持つ：ラテン語 *amas at esurio* の意味は *tu fais l'amour, mais j'ai faim* の意であり、*tu amas at ego esurio* は *toi, tu aimes, mais moi, j'ai faim* の意である」⁷とすれば、こうした統語法は代表的な印欧語がその残滓を留めていると思われる。クリモフのいう活格構造類型の文における二肢性には、主語と述語を分立配置する文字通りの二肢性以外に、1、2人称の場合の（活格、不活格）接辞系列マーカーが動詞述語に抱合されるケース（つまり一肢性）も含まれる訳で

⁴ G. A. クリモフ (石田修一訳) 『新しい言語類型学：活格構造言語とは何か』三省堂 1999、p.94 (Г. А. Климов, *Типология языков активного строя*, Наука, 1977, стр.115)

⁵ 同著 p.95 (同 p.116)

⁶ cf. *Историческая грамматика русского языка, Простое предложение*, АН СССР, Институт русского языка, под ред. В. И. Борковского, 1978, стр.187-188

⁷ A. Meillet, *Introduction a l'étude comparative des langues indo-européennes*, Librairie Hachette, p.244

あるから、これは本来的にはロシア語史におけるあるいは古い印欧語一般における一肢定人称文の形式を含む意味での二肢性についても述べていると考えることができるからである。そして、現行活格言語の場合も印欧語古層の場合も、動詞語に組み込まれる接辞系列マーカ―だけで必要十分であるということは、接辞系列が人称性を示す自立成分として言語意識の中になお存在していることを示しており、その意識の枯渇、希薄化こそが人称代名詞の分立措定を必然たらしめるはずである。

これらの点に関連して、かつてメシチャニーノフは次のように論じたことがある。

一般的に論理的、心理的範疇としての主辞 (subject 主体) とそれについて陳述する賓辞 (predicate 述語) は互いに相関するコミュニケーション (伝達) の二大基本要素であつて、両者は相互的に必須の要素である。ただしこれらの要素が言語化されるか否か、という点では諸言語間に差がある。またこの二大基本要素は言語面では主語と述語として具現化され得るが、その具現化、言語化手法では諸言語間に差異がある、すなわちこの内容の形式化においては差異が見られ、したがって論理的主体と述語は必ずしも文法的主語と述語ではない。メシチャニーノフは、その著『文の成分と品詞』において次のように論じている：「主辞 (субъект 主体) と賓辞 (предика 述語) の文における統語的表現者が主語 (подлежащее) と述語 (сказуемое) であり、それは二つの自立的なまた主たる文成分である。主語と述語は、主辞 (主体) と賓辞 (述語) という発話の二大基本概念を文の中で伝達するが故にこそ主成分として分立している。しかし、主辞、賓辞と主語、述語の間に絶対的の同一性は存在しない。主辞と賓辞の形式的表現は、異種構造諸言語間でも同一言語内でも独自の変種や独自特徴を持つ。……主辞と賓辞は文に存在しなければならないが、それは形式的には一つの文成分の中だけで表現することが可能である。主辞と賓辞が一述語形全体の中で表現し得るのである」⁸。例えば、ロシア語では特に1、2人称動詞形に主体の表現が包摂されている (пиш-у, пиш-ешь の動詞述語形自体に1、2人称主体の表現が含まれる)。同じ手法は、動詞活用構造に代名詞型の人称主体を組み込む言語では広く行われており、カザフ語でも жаз-а-мын (пишу), жаз-а-сын (пишешь) はそれぞれ書く行為を表す語根 жаз に1、2人称代名詞 мен(я), сен(ты)を組み込んだ (ただし Ablaut を施して) 活用構造である。しかし一方では、ここでも文に同一の代名詞を特に

⁸ И.И.Мешанинов, *Члены предложения и части речи*, Наука, Ленингр. отдел., 1978, стр.205-206 (デスニツカヤ、パンフィーロフ、スコリク、フィリン、ヤルツェヴァ等から成る編集委員会によって再版されたもの。初版は1945年で、1946年スターリン賞を受賞したが、この1978年再版では、スターリン賞といわず、「第一級の国家賞 государственная премия первой степени」となっている。当時の政治的な諸事情に翻弄されたメシチャニーノフであるが、この著書自体の価値は今日でも変わってなからう。

分立させて *мен жаз-а-мын, сен жаз-а-сын* のように構文化することも可能である。その場合、前者は文法上の述語だけの一肢文、後者は文法上の主語も述語も存在する二肢文であるが、両文共に主辞と賓辞の表現において同等である。「したがって、*пишу* は一つの形全体に主辞と賓辞を含む完結した文であり、主辞（主体）が特別な文成分として表されていない限りにおいて、この構造に主語は存在しない。一方、主辞（主体）が文の個別成分として表現される時には、主語が現れる。こうして、主語とは主辞（主体）の表現形の一つ」にすぎない⁹。ロシア語も含めた印欧語の動詞活用語尾は、その深い古層においては人称主体の表現要素であり、そのためのマーカーとして語根に付加されたものである¹⁰。何れにしても、文における述語が主体指示指標も含み、かつそれが意志伝達にとって必要十分である限りは、主体表示のために主語を分立させることは余剰であり、分立させる必要性は減ずるはずである。主語の必要性と述語の主体指示能力のこの相関関係について、メシチャニーノフは次のように説明している：「主語は、もう一つの文成分である述語が主体伝達能力を失う場合には、不可欠の文成分である。……述語が、したがって動詞がこの特性をもたない場合は、主体が唯一表示能力を得るのは主語においてのみとなり、そこで主語は文を組み立てる上での必須参与成分となる」。例えば、ギリヤーク語の述語は主体指示能力を持たず、したがって主体を指示する主語が必要となり、結果として、この言語では主語、述語の両成分が文における必須要素となる。この事情はアヴァール語、レズギン語でも同じであるという¹¹。こうした主語と述語の相関性、バラ

⁹ И. И. Мещанинов, *Члены предложения...*, стр.206

¹⁰ 印欧語のいわゆる第一次語尾 (-mi, -si, -ti, -nti)、第二次語尾 (-m, -s, -t, -nt) は本来、主体人称を表すマーカーと思われる。また言語によっては、主体と客体を主語と補語（目的語）として文節化せずに（文の成分として分立させずに）、行為、状態を表す語根に主体、客体の両マーカー（指標）を組み込む形で動詞語を形成する場合があります、さらにそれに加えてアスペクトや法（ムード）や時制（テンス）等を表すマーカーを繋いで構造化する場合もある（いわゆる抱合 incorporation）。例えばグルジア語 *v-kl-av* (1・単主体指標-殺す [語根] -PFSF 現在・未来語幹形成形態素)「私が殺す」；*ø-kl-av* (ゼロ \emptyset は 2・単主体指標)「君が殺す」であるが、客体指標を組み込むと、**v-g-kl-av* (1 単主体指標-2 単客体指標-語根-PFSF) > *g-kl-av* (*v-g* の連続では *v* が落ちる)「私が君を殺す」；*g-kl-av-s* (2 単主体-語根-3 単主体)「彼が君を殺す」；*m-kl-av-s* (*m* は 1 単客体指標)「彼が私を殺す」(H. I. Aronson, *Georgian, A reading grammar*, Slavica Publishers, 1990, pp.40-41, 169-171 等による) 等々。あるいはまた、メシチャニーノフによれば、チュクチ *ты-пэля-ркын-э-гыт* では *ты-гыт* は主体-客体指標（私が一君）と現在時制指標 *-ркын* からなる抱合形式で、「私は君を残して行く」となる。この 1 人称単数マーカー *ты-* は自立的な 1 人称代名詞 *гым* とは異なる形を取っており、その点でカザフ語と異なる（上述）。これはフランス語の人称指標化した人称代名詞 *je* と独立形 *moi* の関係に似ており、したがって、チュクチ語の動詞構造化はロシア語よりフランス語に近い、という：*je-te-quitte* は発音上一体であり、*je, te* はあたかも *quitte* 語根に主体、客体指標を組み込んだかの如くである (И. И. Мещанинов, *Глагол*, Изд. АН СССР, 1949, стр.15 [Наука, 1982, стр.19]; *Члены предложения и части речи*, стр.211 より)。

¹¹ И. И. Мещанинов, *Члены предложения...*, стр.212; cf. *Глагол*, 1949 (1982), стр.57-58 (66-68 レズギン語の例あり)

ンス性は、クリモフ等のいう、いわゆる動詞型→混合型→名詞型という発展過程について想起させる。すなわち、名詞の格の形態と内容が未完成な段階では名詞は無徴（不定格 *casus indefinitus*）であっても、動詞述語の語形に主体、客体指示マーカを組み込んで文成分の統語関係を明示する（動詞型）のに対して、格の発達段階（名詞型）では名詞格形が統語関係を明示するから動詞語へのマーカを組み込みは不要となり（つまり無徴化し）、また名詞に格形態が発達してくるにも拘らずなお機能的に不十分であるため、動詞語にもマーカを組み込んで統語関係を明示する（混合型）、という一般的発達過程である¹²。こうした視点に立てば、ロシア語史における定人称文の頻発は当然であって、一般的にはそれは動詞語に統語関係を指示する指標を集約する古い動詞型の文構成の残滓である、と見ることができよう。

そこでメシチャニーノフは、印欧諸語の内、露仏独英の諸語を比較検討している。主語、述語の両文成分に同時に主体の表現を許容するが（*я говор-ю*）、必ずしも主語による主体表現を義務付けていないロシア語（*говор-ю, говор-ишь, говор-ит...*）、こうした意味での主体の同時表現を許容せず、そのため一定程度、文の二肢（二項）的組み立てから脱却しつつあるフランス語（*je parl-e, tu parl-es, il parl-e...*）¹³、発達した動詞の人称活用組織を持つにも拘らず、主語にも述語にも主体表現を要求するドイツ語（*ich sag-e, du sag-st, er sag-t...*）、主体を表す人称代名詞主語を分立させるが、動詞自体はほとんど人称表示機能を失っていて、人称代名詞が動詞接頭辞化している英語、について比較を行っている。今仮に上の動詞型、混合型、名詞型にこれらを当て嵌めれば、動詞型のロシア語、混合型のドイツ語、混合型から名詞型に移行しつつあるフランス語、名詞型の英語となろうが、専らこの形態的図式だけで事態を単純化して進化を云々することには慎重であるべきことは勿論である。主として形態的、音声的变化を原因として動詞語から失われていく主体

¹² クリモフ『新しい言語類型学 活格構造言語とは何か』三省堂 1999、pp.47, 51, 57, 156, 255 他参照。

¹³ メシチャニーノフは、ヴァンドリエス『言語』、ブリュノー『思考と言語』等を引用しながら、フランス語では「主語は完全に消えており、文に主語が現れるときには、それに呼応する動詞中の指標は消えつつある」（『文の成分と品詞』p.207）、「フランス語は人称語尾を持っていたけれども、後には、六つの活用形の内二つしか残さない段階にまで人称語尾を失ってしまっている」（同 p.310）、とする。つまり、動詞活用語尾は、発音の上では単数 1、2 人称（*je parle, tu parles*）および単数、複数 3 人称（*il parle, ils parlent*）では消えており（[parl]）、語尾の弁別が残るのは複数 1、2 人称（*nous parlons, vous parlez*）の二形のみである（*nu-parl3, vu-parle*）。「人称表示機能が隣接する人称代名詞に移り、そのことが活用語尾の消滅を、また代名詞の人称指標化を惹起した」（同 p.310）。つまり動詞接頭辞化した人称指示指標である。英語ではこの過程はさらに進行し、3 人称単数（-[e]s）以外では活用語尾が消失しているのであるから（*cf.* 3 人称単数形の弁別さえない *can, may, must* 等いわゆる過去現在動詞 *praeteritopraesentia* 起源の助動詞）、そのことと隣接する代名詞の人称指示指標化、動詞接頭辞化の相関関係は一層明白である。

指示機能を、文節化（文の成分化）した代名詞主語あるいは接頭辞化した代名詞指標によって代償的に回復して行く根底には、行為、状態に対する強い主体の関わりを意識因子が働いているはずであり、その意識（内容）の干渉なしに、形態的变化（形式）の自動作用としてこの過程を見ることはできないからである。形式は内容を規定し、また内容は形式を規定する、形式と内容の弁証法的過程こそ事態の本質である、と考える。

II. ロシア語史における一肢人称文の生成過程について

一肢人称文の典型たる定人称文、例えば次のような文は、古文の規範であった：Почто идеши опять, поймал еси всю дань (原初年代記)「どうして（あなたは）再び来るのですか、（あなたは）貢税はすべて取り立て済みではありませんか」；Се князя оубихомъ рускаго, поймемъ жену его Волгу за князь свои Маль (同)「(我等は)ルシの公を殺しました。(我等は)彼の妻オリガを我等が公マルに娶ろうではないか」；Не едемъ на конѣхъ, ни пѣши идемъ (同)「(我々は)馬でも行きません、徒歩でも行きません」；Хошо бо, рече, копие приломити конец поля половецкаго (イーゴリ軍記)「(吾は)ポロヴェツツの野の果てに槍を折らんとぞ思う、と（イーゴリは）言った」；Се написахъ грешное свое хождение за три море (アフナーシー・ニキーチン三洋旅行記)「ここもと（吾は）三洋にわたる我が罪深き旅行記を書き記せり」；А въ Гурмызе быть есми месяц, а из Гурмызы пошелъ есми за море Индейское море (同)「(私は)ホルムズに一月滞在し、ホルムズからインド洋越えに出発した」、等々。

ロシア語史家の多くは、こうした一肢定人称文が古文の規範であり、1、2人称代名詞を配する二肢人称文は、概して、一定の文体的理由（強調、対照対置の必要性等）によってのみ惹起されたとする。例えばロムテフは、次のような「イーゴリ軍記」の例を挙げて、人称代名詞主語はそこに論理的力点が置かれるとき、また相手に対する呼びかけが必要な時に使用されている、とする。

О Днепре Словутицю! Ты пробил еси каменныя горы сквозъ землю Половецкую. Ты ледѣль еси на себѣ Святослави носады до плъку Кобякова. Възлелѣи, господине, мою ладу ко мнѣ, а быхъ не слала къ нему слезъ на море рано (イーゴリ軍記)「ああ誉れ高きドネプルよ、そなたはポロヴェツツの地まで巖の山を穿ち通したではありませんか。そなたはコビヤクの軍陣までスヴァトスラフの舟を揺さぶり載せて運んだではありませんか。(ドネブルの)君よ、わが夫(つま)をわが許へ運び寄せ給え、さすれば(吾は)朝まだき海に向いてわが夫(つま)に涙送らずに済みますものを」

ただし、ロムテフは、すでに「イーゴリ軍記」でも、「対置や論理的力点の要求によって惹起されたものではない人称代名詞の使用例」が現れている、として次の二例も挙げ、これらの例には主語としての人称代名詞の拡大過程の萌芽が見られるとする¹⁴：

О, Бояне, соловию старара времени! Абы ты сна плъкы ушекоталь 「ああボヤーンよ、古(いにしえ)の鶯よ、汝(な)なればこの戦(いくさ)のさまを誼い上げようぞ」

Аже бы ты быть, то была бы чага по ногатъ, а кошеи по резанъ 「もし汝来給うならば、女奴隷は一ノガタ、男奴隷は一レザナになろうものを」

こうして、ロムテフは、「イーゴリ軍記」等において一法定人称文が優勢であること、主体の強調、対置対照の必要性のない場合の主語としての人称代名詞の使用は僅少例に止まるが、後続のロシア語史においては、ニュートラルな主語としての人称代名詞の使用が拡がり、「動詞人称形を述語とする不完全一肢文 *неполные односоставные предложения* は、動詞や連辞の人称形に付置する主語機能での人称代名詞の使用の拡大によって次第に二肢文に転換されていった」と結論している¹⁵。

古文では定人称文が一般的で、1、2人称代名詞主語を措くのは、特に強調、対照対置を示す時であった、というこの結論は、細部を除いて概ねポテブニヤ、ソボレフスキー、シャフマトフ、オブノルスキー、スプリンチャク、ステツェンコ、ボルコフスキー等ロシア語史家一般に共通である、と考えてよからう¹⁶。

¹⁴ *Историческая грамматика русского языка, Простое предложение*, под ред. В. И. Борковского, Наука, 1978, стр.189 (註 11)：ボルコフスキーは、ロムテフが挙げたこの例文を、前後に文脈を広げる中で一定の理由によって人称代名詞配置が必要な例、論理的力点が必要な例として挙げている：「我々自身としては、両者とも代名詞 ты に論理的力点があると考え。特に後者の場合、論理的力点は明らかであり」、それは直後に続く文によって「確認できる」、とする。また、ボルコフスキーは、『東スラヴ諸語比較歴史統語法、単文諸型』においても、「行為主体の対置の必要性のあるとき」、「対置のない場合は、行為主体の意図的な強調のとき」の例として、これらの例を挙げている (cf. *Сравнительно-исторический синтаксис восточнославянских языков, Типы простого предложения*, Наука, 1968, стр.37)。

¹⁵ Т. П. Ломтев, *Очерки по историческому синтаксису русского языка*, Изд. Мос. ун., 1956, стр.55-56, 59；ロムテフは同著において、「イーゴリ軍記」の他、「ロシア法典」、「捕囚ダニールの祈り」、「ヴラヂミル・モノマフ諸作品」について同様の結論を得ている。なお、ロムテフは、「定人称文」に「不完全」を冠した理由について説明していない。

¹⁶ А. А. Потебня, *Из записок по русской грамматике*, т.1-2, 1958, стр.246；А. И. Соболевский, *Лекции по истории русского языка*, 1907 (1962, Mouton reprint), стр.240-242；А. А. Шахматов, *Синтаксис русского языка*, Учпедгиз, Лен.отд., 1941, стр.64-65；С. П. Обнорский, *Очерки по истории русского литературного языка старшего периода*, Изд. АН СССР, 1946, стр.26 (ロシア法典), 49, 60-61 (モノマフ諸作品), 102, 112 (捕囚ダニールの祈り)；Я. А. Спринчак, *Очерк русского исторического синтаксиса, I (Простое предложение)*, Рядянська школа, 1960, стр.59-62；А. Н. Стеценко, *Исторический синтаксис русского языка*, Выс. школа, 1970, стр.72-76；В. И. Борковский, П. С. Кузнецов, *Историческая грамматика русского языка*, Наука, 1965, Изд. второе, дополненное, стр.405-406 他；В. И. Борковский, *Синтаксис древнерусских грамот, Простое предложение*, Изд. Львов. ун., 1949, стр.90-92 他；ただし、「ノヴゴрод第一年代記古輯(シノド本)の統語現象」を研究したイストリ

また、最も詳細かつ広範囲にこれらの問題を検証したボルコフスキーの一連の研究は、17世紀以後漸次二肢文規範が広がっていくが、11-14世紀は定人称文が優勢であること、1、2人称代名詞の配置が強調、対置対照等「厳密に定まった法則」に拠ることは11-14世紀の古文献全てに共通する特徴であること、を示している¹⁷。例えば、ボルコフスキーは、11-12世紀の文献から「シナイ聖人伝」、「スヴァトスラフ文集 1076年」を取り上げ、「シナイ聖人伝」においては定人称文が1063例、1、2人称代名詞つき二肢文は245例（この内184例は1人称代名詞 *азь, язь* の場合）、つまり23%であること、また「文集 1076年」では定人称文が401例、1、2人称代名詞つき二肢文が35例（8.7%）であることを示している¹⁸。こうして、ボルコフスキーの結論は、先ず第一に、11-14世紀（古期）のあらゆる文献において定人称文が優勢であり、15-17世紀（中世）にもこの事情に目立った変化がないこと、第二に、人称代名詞の配置は意味的文体的にニュートラルなケースではなく、主語主体の強調、対照・対置の必要性があるとき、あるいはまた呼語との共起によって惹起されたものであること、これは「厳密な定まった規則」であり、この規則からの逸脱は少数に過ぎず、逸脱が見られるようになるのはようやく古期（11-14世紀期）後半以後であること、第三に、17世紀以後は定人称文の二肢文による駆逐過程が進行すること、である。第三の点についてボルコフスキーは次ぎのようにいう：「17世紀の文献資料の検討によって、この時期は定人称文の運命における決定的な時期であり、一肢定人称文の二肢文による最終的駆逐を準備した時期であった、という結論が得られる。定人称文は、文学作品でも生きた口語の記録にも広く現れているが、17世紀にとりわけ文体的目的で、ますます大きな地位を占めるようになったのは同義の二肢文である。同様の状況は中世白ロシア語および中世ウクライナ語でも見られる。人称代名詞が文成分に加わり、定人称文が二肢人称文に変わると、人称代名詞の配置によってのみ行為者を強調する可能性は失われた。言語は、1、2人称を強調する別の手段を開発した。ますます広く使われるようになるのは付語 *приложение* それも拡大型の付語（特に文学作品において）であり、ますます大きな役割を演ずるようになるのは語順であり、また

ナだけは、一肢定人称文は古代ロシア語の規範ではなく、主語の位置を不補充にした二肢文の変種に過ぎず、また人称代名詞の配置は論理的強調と解することはできない、とする結論を得ている。すなわち、イストリナは、古代ロシア語に一肢定人称文と称する特別な文タイプは存在しない、と考えている（cf. E. C. Истрина, *Синтаксические явления Синодального списка 1-й Новгородской летописи*, Пг., 1923, стр.38-44; *Историческая грамматика русского языка, Простое предложение*, под ред. В. И. Борковского, АН СССР, Институт русского языка, 1978, стр.190）。

¹⁷ *Историческая грамматика русского языка, Простое предложение*, под ред. В. И. Борковского, 1978, стр.193

¹⁸ *Историческая грамматика русского языка, Простое предложение*, под ред. В. И. Борковского, 1978, стр.192

個々の文成分や文の諸部分を結び付ける接続詞である。1、2人称代名詞のない文は、標準語のこの新しい段階では不完全文であり、説明を要するのはもはや代名詞の配置の方ではなくて代名詞が文に存在しない場合の方である」¹⁹。

要するに、ボルコフスキーの定人称文発達史観は次のようになろう。古代、中世期における定人称文の圧倒的優勢の事情を確認できる、次いで近世 15-16 世紀についてもこの事情は変わらず、あらゆるジャンルの文献で定人称文が広範かつ安定的に用いられている、と認定できる。しかも、15-16 世紀において、「行為主体が対置されるときも」定人称文であることを「強調しておくべきである」²⁰。それに続く近代 17 世紀はどうか。

「17 世紀に属する標準語のあらゆる文献が、二肢文はもはや例外ではないが、定人称文が文語の規範であったことを示している」²¹。さらに 17 世紀口語における定人称文の運命を検証するために、ボルコフスキーは、「17 世紀ロシア語会話帳手書き写本 *Русский рукописный разговорник XVII века*」とハインリッヒ・ウィルヘルム・ルドルフ (Heinrich Wilhelm Ludolf) の「ロシア文法 *Grammatika russica*」(1696 年)に収められている会話帳という二つの口語資料を取り上げている²²。この際、両文献とも連辞付パーフェクトは存在せず、パーフェクト(過去時制)の定人称文が存在しないという。また「手書き写本」では定人称文の割合は 17.6%であるのに対して、ルドルフ「文法」では 54.4%である、という統計を示している²³。こうした統計を示す一方で、二肢人称文について、両会話帳の共通特徴は、「(現在、未来時制でもパーフェクトでも)人称代名詞に論理的力点のないケースの方が代名詞に論理的力点を置くケースよりはるかに多く」、特に「写本」ではそうである、とした後²⁴、「17 世紀の生きた口語では、一肢定人称文は二肢文によって駆逐されつつあり、とりわけ連辞を欠いて人称指示がない形のパーフェクトの文におい

¹⁹ *Ист. гр. рус. яз.*, под ред. В. И. Борковского, Наука, 1978, стр.216; cf. *Сравнительно-исторический синтаксис восточнославянских языков, Типы простого предложения*, Наука, 1968, стр.77

²⁰ *Ист. гр. рус. яз.*, *Синтаксис, Прост. предл.*, 1978, стр.206-207; Да сына же моего Ивана благо словляю своим царством Руским, чем я благословил отец мой, князь Василей, и что мне бог дал (Москюгрю 1572 г., Дух. дог. гр. №104); Да ему жь даю город Романов на реке на Волге, а держи его, сын мой Иван, за Нагайскими мурзами по тому, как было при мне (同); Молю вась святѣишии отцы мои. Аще обретохъ благодать предъ вами. Утвердите въ мя любовь. Яко и приснаго вамъ сын а (Стоглав) 等々の例を挙げている。

²¹ 同上 211

²² 同上 208

²³ 現在、未来時制のケースだけを考慮した定人称文の割合を見れば、「写本」対ルドルフ「文法」は 30.2%: 123%になり、ルドルフでは定人称文が優勢であることを示している (cf. *Ист. гр. рус. яз.*, *Синтаксис, Прост. предл.*, 1978, стр.208)。

²⁴ ただし、タルラーノフは、「ボルコフスキーは、これら構文における人称代名詞の使用が、これらの文と論理的力点の強調とのはっきりした関連を顕していない、ことを指摘して」、と反対の趣旨の解説をしている。タルラーノフのこの引用の仕方は誤りと思われる (З. К. Тарланов, *Становление типологии...*, 1999, стр.76)。

てこの過程が顕著である」、という結論を導いている。しかし、定人称文は、歴史的にはパーフェクトを主たる基盤として成立したのではなく、これは連辞を失って過去時制一般を表すパーフェクトの形式の成立が形式の歴史的变化の自動作用として二肢文化を余儀なくさせた（あるいはまたまた二肢文化の契機を作り出した）ことの説明にはなるが、それ以外の時制形式（定人称文の主たる基盤を成して来た時制形式）での定人称文の二肢文化の直接的理由を説明することにはならない、と本稿筆者は考えている。ともかく、ボルコフスキーの主張から判明することは、少なくとも近代が始まる直前までまだ定人称文は根強くロシア語固有の統語法であり続けた、にも拘らず、17世紀には突如としてニュートラルな人称代名詞を含む二肢人称文が多発して、二肢文に転換して行った、という結論が導き出されていることになる²⁵。しかし、後述するように、突如として17世紀を一肢定人称文から二肢文への転換点と見なし、それ以後ロシア語統語法史を全体として一肢定人称文の二肢文化過程と見なす視点は、多くの問題を孕んでいると思われる。

不定人称文に関する研究の現時点での到達点はどうか。

ボルコフスキーによれば、不定人称文は、①主語が存在しないこと、②3人称述語形を持つこと(過去、現在、未来の全時制において)、③行為主体は不定人称群であること、という三特徴を含む「明確な構造・意味タイプを有し、原則として、不定人称文と不完全文の境界を定めることは困難なことではない。動詞述語人称形の指す人称の不定性こそが不定人称文の特徴である。行為者の名称たる主語を欠く不完全文とは異なって、不定人称文は行為者人称の復元は不要である。文の主たる意味的核心は行為そのものだからである」、としている²⁶。ボルコフスキーらこれまでのロシア語史家、研究者が例証する不定人称文のモデルは次のようなものであろう。例えば、リューリクの後継者オレグが、次いでイーゴリがグレキとの間に結んだ、原初年代記に記録されている条約文(それぞれ912, 945年)を初めとして、ロシア法典他早期の諸文献に見られる以下のような文

²⁵ ボルコフスキーは、両会話帳における定人称文例、論理的力点がない人称代名詞を持つ二肢文例、行為主対置のある二肢文例という三種の例文を挙げているが、人称代名詞配置の二肢文例は短文であり、本稿筆者には、「論理的強調がない」として挙げられる次の文例等も十分説得力があるとは思われない。: почему ты знаешь; челомь бью, я не усталъ; я радъ буду часто свидать ся стобюю (以上ルドルフ); Гарман: Куды топер идешь?; [Мария]: Анна, отколе ты идешь?; Маря: я хочу правду свидати. Пойди, постели скатерть да поспеши (以上写本) 等々の例。

²⁶ *Ист. гр. рус. яз.*, под ред. В. И. Борковского, Наука, 1978, стр.217; なお、同著者ボルコフスキーが当該部分を担当した次の著書の記述では、第三の特徴を特に挙げていない。*Сравнительно-исторический синтаксис восточнославянских языков, Типы простого предложения*, Наука, 1968, стр.78; В. И. Борковский, П. С. Кузнецов, *Ист. гр. рус. яз.*, Наука, 1965, стр.409

である。

Аще полоняникъ обою страну держимъ е или от Руси или от Грекъ, проданъ в ону страну, аще обрящется ли Русинъ ли Греченинъ, да искупятъ и възвратятъ искупное лице въ свою сторону (912 年条約文)「もし双方 (何れか) の捕虜がルシ人あるいはグレキ人により拘束され他国に売られ、かつルシ人あるいはグレキ人が (そこに) 現任されれば (その者を) 請け出し、また請け出されし者を自国に帰還せしむべし」

Аще ли оускочить створивый оубои и оубежить, аще будет имовить, да возьмутъ имѣнье его ближнии оубьенаго. Аще ли есть неимовать створивый убийство и оускочить же, да ищють его, дондеже обрящется (945 年条約文)「もし殺人者が逃亡、逃隠し、かつ有産者なれば、殺されし者の近親者をしてその者の資産を没収せしむべし。もし殺人者が資産をもたず、かつ逃亡せしときは、(その者が) 見出されるまでその者を搜索せしむべし」

Аще ли ударитъ мечемъ, или оубьеть кацѣмъ лобю сосудомъ, за то ударение или бьение, да власть литръ 5 серебра по закону роускому (912 年条約文)「(人が) もし剣もて襲撃し、あるいはまた何か器物もて打擲せしときは、その襲撃あるいは打擲行為に対するにルシの掟に従い銀五リトラを差し出すべし」

Аже ударитъ мечемъ, а не оутнетъ на смерть, то три гривны (ロシア法典)「(人が) もし剣もて (人を) 殴打し、ただし致命的殴打に至らざれば、三グリヴナ (を支払うべし)」

Егда ты оклеветають размѣи, егда е чьто до тебе въ улеветѣ тои, аште ли нѣсть, то мни акы дымъ расходяшту ся клеветоу (1076 スヴァトスラフ文集)「もし (人) がお前を中傷する (お前が人に誹謗される) 場合があるにせよ、その中傷にはお前に関わる何がしかのものがあると心得なさい。もし何もないのであれば、その中傷を雲散霧消する煙の如きものと考えなさい」

Томъ же лѣтъ, наставышо индикта 15, убиша Гюргя Жирославица и съ моста съвергоша (*aor*), месяца сентябрия (ノヴゴрод年代記)「同年、インディクトの十五年になると、(人々は)ジロスラフの子ギュルギを殺し、橋から投げ落とした。9月のことである」

Дивно видехъ Словѣнскую землю идучи ми сѣмо. видѣхъ бани деревены, и перезьгутъ е рамяно, и совлокутся, и будуть назн, и облѣются квасомъ уснианымъ, и возмутъ на ся прутье младое, и бьютъ ся сами, и того ся добьютъ, одва вылѣзут ле живы, и облѣются водою студеною, и тако ожиутъ (原初年代記)「(私は) こちらへ来る途中に、スロヴェネの国を驚愕の内に見ました。(私は) 木の風呂 (*pl.*) を見ましたが、(人々は) それらを強く焚き、服を脱いで裸になって鬆シクワスを身体にふりかけ、自分に向かって若木を取

り上げて自分で自分を打ちたたき、やっと生きて這い出せるほどにまで身体を打ちすえると、冷水を浴び、こうして生き返ったようになるのです」

上述のボルコフスキーの言説を言い換えるならば、不定人称文の認定に最も重要な条件は、述語形の指す人称に不定性が存すること、したがって人称の復元が不要であること、になる。ただし、上記の例文の不定性の程度はみなそれぞれ異なるであろう。不定人称文は、主語人称の不定性の程度から見て、定人称文と無人称文の中間的な位置を占める、と思われる。述語自体は行為者、特徴の担い手（主語）の人称と数（3人称単数あるいは複数）を指示するが、1、2人称主語を欠く定人称文と比べると、主語人称の具体性を欠き、その厳密な復元提示はできず、また復元の必要性が劣るからである。すなわち、最も人称の不定性程度が低い（すなわち定性程度が高い）文から最も人称の不定性の程度が高い文まで、いわば定性階梯の高い文種から低い文種の順に並べると、二肢文→定人称文→不定人称文→普遍人称文→無人称文、ということになる。ただし、このうち普遍人称文は古代ロシア語期に存在しないと思われる²⁷。

最も不定性の高い不定人称文とは、具体的な行為主体の示唆を文脈に含まず、不明である不定人称文であり、書き手は行為主体に周知していないか無関心であり、行為主体が漠然としており、全ての人々一般を想定する、あるいは行為主体についての観念が抜けているのである（例えば *звать-звать* 動詞と意味的にそれに類似する動詞 *сказать-сказано*, *глагол-глаголь* 等では典型的）。一般的に不定人称文では、書き手、読者共にその関心は益々行為主体ではなく行為自体に集中して行くと思われる：

Том же лѣтъ, по грѣхѣмъ нашимъ, придоша языци незнаеми, ихъ же добръ никто же не вѣсть, кто суть и отколе изидоша, и языкъ ихъ, и котораго племене суть, что вѣра ихъ; а зовуть я Тагары, а инии глаголють Таурмены, а друзии Печенѣзи （ノヴゴロド年代記、スズダリ年代記）「同年我等の罪故に知らない民族がやって来た。彼らが誰なのか、何処から来たのか、彼らの言葉（が何であり）、如何なる種族の者であるのか、彼らのことは誰も良く知らない。（人は）彼等をタタールというが、タウルメニという者やペチェネギという者もいる」

А Святославъ мутень сонъ видѣ въ Киевѣ на горахъ. «Си ночь съ вечера одѣвахуть мя, —рече,—чръною паполомоу на кровати тисовѣ; чръпахуть ми синее вино, съ трудомъ смѣ

²⁷ 述語全般の絶対化（主語からの相対的独立化）傾向の進行過程を背景として、ジャンルのにも限られた範囲、特に俚諺等において、ようやく17世紀以後、発生して来た文種であると思われる（cf. З. К. Тарланов, *Становление типологии русского предложения в ее отношении к этнофилософии*, Петрозаводский госуд. университет, 1999, стр.64）。

шено; сыпахуть ми тѣщими тулы поганыхъ тльковинъ великий женчугъ на лоно и нѣгуютъ мя»(イーゴリ軍記)「スヴァトスラフ(公)、キエフの丘の上にて怪しき夢を見給えり。

『吾、昨夜は宵のうちより櫛の床(とこ)で黒衣の経帷子を着せられて、涙混じりの青い酒を吾に汲み与え、邪教説く輩の空矢筒から大粒の真珠玉を吾に振り掛け出して、吾を陶然の境地に誘う者あり』、との(公の)言葉」²⁸

また、3人称複数形だけを構造特徴としてもつ現代ロシア語の不定人称文と異なって、古代ロシア語では3人称単数形式を取る不定人称文が存在したことが特徴である(上の条約文やロシア法典の例)²⁹。例えば、ロシア法典にはかなりの数の3人称単数形を取る文が見られる。例えば、上に挙げたロシア法典の例文をその前後に文脈を広げて示すと以下の通りになる:

Оже придетъ крѣвавъ моужь 「(自由人の) 男、血まみれて来たるとき」、Оже придетъ крѣвавъ моуже на дворъ или синь, то видока емоу не искати, нъ платити емоу продажо 3 гривны 「男、血まみれてもしくは青痣をなして(公の)邸に来たる時、その者証人を求めるに如かず、その犯人は(公に) 罰金3グリヴナを支払うべし」; или не будетъ на немъ знаменья, то привести емоу видокъ слово противоу слова 「あるいはその者に(殴打の) しるしなくば、その者は証言付き合わすべく証人を連れ来たるべし」; а кто будетъ началь, тому платити 60 коунь 「また(ある者が) 先に仕掛けし時その者 60クナを支払うべし」; аче же и крѣвавъ придеть, или будетъ самъ почаль, а выступять послуиси, то то емоу за платежъ, оже и били 「また血まみれて来たるも、自らが仕掛け、しかも証人が現れし時は、その者が殴打されしことがその者の罰金に代る」. Аже ударить мечемъ, а не оутнеть на смерть, то 3 гривны, а самому гривна за рану, оже лѣчбное 「(人が) もし剣もて(人を) 殴打し、ただし致命的殴打に至らざれば、その者、負傷を償うべく治療費として1グリヴナを(支払うべし)」; потнеть ли на смерть, то вира 「(人が)死に至らしむ殴打をなせば、人命金(ヴィーラ)(を支払うべし)」. Или пхнеть моужь моужа любо к собѣ любо от себе, любо по лицо оударить, или жердью оударить, а видока два выведоуть, то 3 гривны продаже 「もし人が誰かある人を相手側へあるいは自分側へ突付き押す行為を起

²⁸ 木村彰一訳『イーゴリ遠征物語』(岩波文庫)は、この部分の不定人称文に、「……宵のうちに誰やらん櫛の床に予を寝かせ墨染めの経帷子を着せてからに苦味の混じった青い酒をばしきりに汲んで予に差し出しおった。……」のように、「誰やらん」の訳を与えている。中村喜和訳「イーゴリ軍記」(筑摩叢書『ロシア中世物語集』)では、前半を、「着せられて」と受身に訳し、後半では、「……差し出し……ふりかけて……いたわる者があるではないか」、となっている。

²⁹ 3人称単数形の不定人称文の存在を初めて認定したのはボルコフスキーであるという。
cf. *Ист. гр. рус. яз., Синтаксис, Прост. предлож.*, 1978, стр.218-219; Б. И. Борковский, *Синтаксис древнерусских граммат, Простое предложение*, Из-во Львов. ун., стр.109

こさば、あるいはまた顔面を殴打せば、また棒もて殴打せば、二人の承認を連れ来たるとき、3グリヴナの罰金(を支払うべし)»; *оже боудеть варягъ или колбягъ, ть полная видока вывести, и идета на роту* 「ヴァリヤーク人あるいはコルビヤク人なれば、二人の完全数証人を連れ来たるべし、かつ彼等二人をして誓わしむべし」(ロシア法典)

このロシア法典の例では、先に挙げた3人称単数形不定人称文に先立ってあるいは前後して、「男(мужь)」あるいは「誰かある者、ある人、誰であれ(кто)」を主語とする二肢文が描かれており、したがってこの種の不定人称文の不定性はより低い、つまり行為主体は特定、復元しやすい、と思われる。そのことに関連して、不完全文との差異の不明確性がいわれるのである。一般には、単数形不定人称文の主体の不定性の程度は複数形のそれに比して低い、つまり具体性が高いと見なし得る。したがって、単数形不定人称文が次第に規模を縮小、削減させて来ることに鑑みれば、一般的には、上の階梯はさらに、単数形不定人称文 → 複数形不定人称文となって、歴史的にはこの文種の一肢文は益々不定性程度を強め、述語の絶対化、独立化の方向へ進んできた、といえよう。単数三人称形の不定人称文では、主語は概ね *кто* (*кто-то*, *кто-нибудь* の意の不定代名詞)が表す主語を暗示しており、一方、3人称複数形の不定人称文では、*какие-нибудь люди* のような意の主語を想定できるが、述語の単数、複数形は機能的には単数性も複数性も表示し、またその複数性が全ての人々一般を、あるいはまたある一定の具体的人間集団を暗示する等、文脈環境によって様々である(特定するのではなく、あくまでも暗示するに過ぎないが)。そのため、古スラヴ語や古代ロシア語において、不定人称文と他の文種(不完全文等)との境界が必ずしも明確でない場合が頻出することが指摘されるのである。不定人称文について論ずる際には、かつて山口巖教授が論じられたように、「人称文においてすら必ずしも一々主語を明示する必要を持たない古代ロシア語」の環境にあつては、不定人称文と認定する当該文の文脈を広げて「超文的単位」を設定してかからなければ、その認定に客観性を持たせることが困難である、という事情がある³⁰。例えば、「ノヴゴロド第一年代記シノダル本の統語現象」を研究したイストリナも、「不定人称文か不完全文か決するのが困難な場合が時に見られる」として、*выгнаша новгородьци Соудила ис посадничества и по том изгнании 5-и днь оумре и потом даша посадничество Якоуноу Милославицу* 「ノヴゴロドの人々はスズルを市長官職から追放したが、追放の五日後に(彼は)亡くなった。その後(人々は)ミロスラフの子ヤクンに市長官職に与えた」の

³⁰ 山口巖「超文的単位の設定と構造をめぐって」(山口巖教授停年記念論文集『ことばと構造とことばの原理』所収、日本古代ロシア研究会 1998、p.205-227、)

ような文を挙げているが、一方ボルコフスキーは、この文では主語（ノヴゴロドの人々）は文脈によって容易に復元できるから、これを不完全文と認定している³¹。本稿筆者も、不定人称文と不完全文の認定が困難な場合は確かに存在する、と認識しているが、歴史的には「不定人称文はその使用範囲を拡大し、構造・意味的にどの文型に属するか不明な文種を次第に縮小してきている」とするボルコフスキーにここでは従っておく³²。こうして、当初から劣勢であった3人称単数形不定人称文は、不定代名詞 *кто* が率いる二肢文あるいは3人称複数形不定人称文との競合に堪え得ず、16世紀にはすでにアーカイックになって消失の運命を辿るが、ボルコフスキーは、3人称単数形不定人称文を除いて、文献出現以前の時期から不定人称文は「ロシア語史全史にわたって変化を受けず」、安定した文種だとしている³³。

何れにしても、ボルコフスキーの諸著作、論文より見て、今日最も標準的に理解されている限りでは、不定人称文は文献出現以前に成立し、それ以来一貫して連続的にロシア語史に残っている、ということになる。「不定人称文は、ロシア語史全期間に亘って変化を受けておらず、それは標準語であれ方言であれ現代ロシア語に見出す。消滅したのは不定人称文のある種の文型のみであり、それ以外の基本文型の使用範囲は広がっているのである」³⁴。「消滅した文型」とは、すでに上に見たように、3人称単数形のそれである。こうした見解は大方のロシア語史家の認定する所である。3人称単数から複数形への不定人称文の文型の形式と内容の定着化過程の意義については、ゲオルギエヴァの言葉を借りれば、「不定人称文の基幹的発達傾向は、単一個別性 (*единичность*) を排した不定的実体 (*неопределенная субстанция*) としての主体の意味付けに対応した、主成分の表現形式、を漸次鮮明にして来たという点に尽きる」ということになろう³⁵。

今日最も標準的であると思われる、以上のボルコフスキー等ロシア語史家の一肢人称文に関する定説を再度総括的に述べれば、11-17世紀までは定人称文と不定人称文という二つのタイプの一肢人称文がジャンルの別なく広く使われたが、17世紀以後定人称文は標準語から消滅し（ただし諸方言には残滓している）、二肢文に変わった（しかも17世紀期以前は定人称文が規範であり、二肢文は特殊な文体的機能を負っていた）、一方、不定人称文は文献出現期以前より連続不断の歴史を経て拡大あついは肥大化しつつ今日

³¹ *Ист. гр. рус. яз.*, под ред. В. И. Борковского, Наука, 1978, стр.218

³² *Сравнительно-исторический синтаксис...*, *Типы прост. предл.*, стр.80

³³ *Ист. гр. рус. яз.*, *Синтаксис, Прост. предлож.*, 1978, стр.217, 220

³⁴ *Ист. гр. рус. яз.*, *Синтаксис, Прост. предл.*, 1978, стр.217

³⁵ В. Л. Георгиева, *История синтаксических явлений рус. яз.*, Просвещение, 1968, стр. 12

に至っている、ということになる。

ところで、タルラーノフ『民族的哲理との関係におけるロシア語文型の生成過程』は、一枝文の二枝文化ではなく、一枝文の肥大化こそ、ロシア語史を貫く真の文生成過程であるとし、その一枝文の肥大化をロシア民族の謂わば神経的 DNA 要素（民族精神）に結び付けて結論付ける観念的な議論も含まれるが、一枝文肥大化過程を、民族精神の特徴としての、主語・述語形式の「客観化 объективирование」、「普遍化 обобщение」、あるいは述語成分の「絶対化 абсолютизация」つまり独立化傾向の反映と主張しており、これは山口巖教授の「述語の相対的独立化」に相当する主張である点で興味深い。また同著は、一枝人称文（定人称文、不定人称文、普遍人称文）を個別に切り離して観察するのではなく、これらを一つの連続的な派生階梯として、またそれらとの「絶対化」という共通の分母において無人称文を観察している点で展望性がある。これらを一つの連続的派生過程の中で捉える観点は注目して然るべきである³⁶。そのタルラーノフは、上述のような定説に対していくつかの問題点を指摘している。

例えば、かつて古代ロシア語では定人称文が規範であり、1、2人称代名詞を配した二枝人称文はニュートラルな文型ではなく、強調、対置・対照、呼語随伴という特殊な文体的職能を負った文型であったのだから、この論理からすれば、その文体的条件を持たない二枝文は不可能になるはずであるが、17世紀以後一枝定人称文は消滅して二枝文化すると説く、17世紀以後以上の特殊な文体的任務は別手段（付語、語順機能、接続詞の駆使）に移ったからだ、というのが定説である。しかしこれでは、何故17世紀以後突如そうした事情が発生したのか不明であり、また論理的強調手段として発達してきたとして挙げられる「別の」文体手法は何も17世紀以後に限ったことではなく、それ以前にも存在した手段であり、さらに17世紀以前も以後も強調や対置・対照が文脈環境次第であることに変わりはない、という点である³⁷。17世紀は、一般的にロシア語史の移行期、

³⁶ З. К. Тарланов, *Становление типологии русского предложения в отношении к этнофилософии*, Петрозаводск, 1999. なお、言語諸現象を特殊な民族精神、民族性から観念的に説明しようとする傾向（民族主義的傾向）は近年のロシア語研究に散見されるように思われる。例えば Анна Вежбицкая, *Сопоставление культур через посредство лексики и прагматики. Языки славянской культуры*, 2001 等。一方、山口巖教授は、上述のように述語の相対的独立化に基層あるいは宗教を含めた文化の性格の影響を示唆しつつも、言語学の任務は、まずは「できるだけ客観的な資料に基づいて、言語の内的な論理を考察し、それを周辺科学に提供すること」、だとされている。

³⁷ タルラーノフは、ここで17世紀の「エルシ・エルシェヴィチ物語」(Повесть о Ерше Ершовиче)の例を引きながら、古代でも中世でも、1、2人称人称代名詞主語の配置は、特殊な意味・文体的な条件によるのではなく文脈環境次第であることを示している：Господа мои судии, им яз отвечаю, а на них яз буду искать безчестия своего, и назвали меня худым человеком, а яз их не бибал и не

過渡期とする伝統的通念があり、こうした通念=公理からすれば17世紀という時期を持ち出せば、まるで論証の必要はないかの如くだ、というのが定説に対するタルラーノフの反論である³⁸。さらにまた、もし定人称文の二肢文化への進化が一般的傾向だというのなら、どうしてこの傾向は一枝文の典型たる不定人称文の機能・構造的地位にも及ばないのか、これが第二の疑問である。定人称文の機能範囲はむしろ新しい時代に向けてますます拡張、肥大化して行っているのである。タルラーノフによれば、こうした問題提起がなされないのは、組織的、構造的に相関するはずの統語構造全体を通観的に展望せずに、一枝人称文（定人称文、不定人称文、普遍人称文）内の個々の内的相関性を切り離して原子論的に眺めているからである。一枝定人称文は二肢人称文に変わり、一方一枝不定人称文は機能範囲を拡張して肥大化する、この正反対の方向性の矛盾をどう説明するのか、という問題である。第三に、定説は、文の進化を語りながら、文の構成成分、なかんずく一枝人称文型を構成する動詞形自体の意味、構造に起った変化との関連を無視している、という点である³⁹。要するに、ロシア語史の総方向、主要な流れは果たして一枝文の二肢文化なのか（ボルコフスキー等多くの史家の定説）それとも二肢文の一枝文化なのか（タルラーノフ）、という論点が浮かび上がってくる。

ボルコフスキー自身が挙げた17世紀口語に関する統計事実（上述参照）によってさえ、ルドルフの「ロシア文法」において定人称文は二肢文に対して優勢である。17世紀文語における二肢文に対する定人称文の優勢性についても、ボルコフスキーの確認するところである（上述参照）。さらにボルコフスキーは、17世紀の口語資料として実は上述の統計以外に「17世紀俚諺集 Сборник пословиц XVII века」を取り上げ、そこでも1、2人称代名詞を欠く普遍人称文あるいは定人称文が優勢であることを示している⁴⁰。これらの事実は全て、17世紀を境にして一枝文の二肢文化過程が進行したことを証明しないのである。してみれば、印欧語の原点から17世紀に至るまでの文型の変遷史は如何様なものか。メイエによって、古層の1、2人称抱合形式も含めた二肢性を原点として、ま

граблывал и не знаю, не ведаю; И судии спрашивали Осетра: «Осетр, скажи нам про того Ерша, что ты про него ведаешь?» И осетр, стоячи, молвил: «Право, я вам не послух, ни что, а скажу про Ерша правду...» (3. К. Тарланов, *Становление типологии...*, стр.62)

³⁸ 3. К. Тарланов, *Становление типологии...*, 1999, стр.60-62

³⁹ 3. К. Тарланов, *Становление типологии...*, 1999, стр.62-63

⁴⁰ ただしボルコフスキーは、俚諺における一枝文の優勢は、それらが17世紀以前に発生してそのまま継承されてきたものだから「一定程度においてのみ」17世紀口語資料として利用できるもので、条件付の資料価値にすぎない、という趣旨の発言を行っている (*Ист. гр. рус. яз., Синтаксис, Прост. предл.*, 1978, стр.210-211)。一方、タルラーノフは、「俚諺はその性質、文体・ジャンルのに本来的な統語的古体性を許容しない」ものであって、生きた口語規範を反映しないわけには行かないものだ、と主張している (cf. 3. К. Тарланов, *Становление типологии...*, стр.76-77)。

たメシチャニーノフによる英、独、仏、露語の比較対照を勘案するならば、ロシア語史の主流は主体（主語）の重複表現（pleonasm）をすなわち主体表現の余剰性を回避すべく主語の位置を不補充にする構文法を構築する方向へ進んで来た、加えてこの過程は17世紀に至るも根強く保存されてきた、ということになろう。これは一面では、ロシア語ではかなりの長きに亘って動詞語尾形式の人称性（主語主体）表示が意識の中で枯渇、消滅することなく保存されて来たことも示している。そこでタルラーノフは、ロシア語史の17世紀以前と以後の二つの段階に概ね次のような趣旨の定式化を行っている⁴¹：1）17世紀民族形成期以前の段階：二肢文との互換的あるいは同義的相関性を持ちながらも、文の主語主体形式の客観化傾向が作用する過程の進行の中で、具体人称的因子を圧縮する方向へ向かう一肢文が生成されて行く段階、2）17世紀以後の民族形成期段階：一肢文が二肢文との選択互換的相関性を失う一方で、一肢文自体が具体人称、具体主語主体的因子の実現度の面で相互対立する文種に細分化されていく段階。結果として、17世紀以後、二肢人称文（起源的には第一次の本源的な文種）、一肢人称文（起源的には第二次の派生文種）、無人称文（起源的にはこれも第二次派生だが、この文種の大量多方向派生基盤、つまり非再帰動詞は勿論再帰動詞、不定詞、形容詞、名詞等という多種多様な語詞からの派生基盤を勘案すれば、第三次派生文種ともいえる）という新たな単文パラダイムが形成され行くのである。さらに一肢人称文の細分化についていうならば、17世紀以前から規範であり続けている定人称文は口語の慣例として、また物語ジャンルでもますます活動、機能範囲を広げて行く不定人称文に加えて、17世紀以後ジャンルの的には俚諺的なものに限られているとはいえ、新たに普遍人称文が登場してくる。普遍人称文は、形式的構造的に独自性を持つ訳ではなく、「内容・テーマ的な合目的性」において認定される文種であるから、「形式的・統語的な文脈環境の関連性を要求しない」⁴²。したがって、普遍人称文は、定、不定人称文と同一の一肢人称文という構造、形式を基にして機能的に派生してきたものである。こうして、17世紀以前と以後は、一肢文の二肢文化過程への移行期ではなく、一肢人称文の細分化、階層性の進行深化という点で相対立する時期なのである。

一肢人称文内の細分化、階層化過程こそがロシア語史の主流であるという点について、タルラーノフは繰り返し強調している：「一肢人称文の最も重要な特徴は、主語主体性 субъектность を具体的なものから抽象的、一般的なものものに至る連続体、階梯として

⁴¹ 3. К. Тарланов, *Становление типологии...*, стр.68

⁴² 同上 стр.64-65

実現するという点にある……一肢人称文は、文における主語主体関係の多変態段階、多階梯であり、また文法的に表現された主語主体性 *субъектность* を保持しつつ、動詞特徴の具体的担い手としての主語主体 *субъект* を消去していく階梯である、「純統語面において、一肢人称文は暗示的に実現される主語主体性 *субъектность* を保持しつつ主語主体 *субъект* を遠ざけ退けて行く多階梯、多段階である」⁴³。また、タルラーノフによれば、統語面のこの多変態階層性、階梯性は、既知性・未知性（親近性・非親近性）の程度に応じて細分化発達を遂げた代名詞組織（疑問・関係代名詞、不定代名詞、普遍・定代名詞）の語彙・意味的階層によく対応したものだという（*къто - нѣкъто - къто* [関係代名詞] - *нѣкъси - нѣкоторыи - къто любо - къто коли - кто-либо - кто-нибудь* 等）。「古くから現れ歴史的に熟成された来た、人称表現面でのロシア語の意味的ポテンシャルは、結局のところ、未知の人称の意味素を階梯、階層的に、連続性を以って表す語彙素群総体の形成を惹起した」、「民族的世界観の最重要形式たるロシア語の生来の特質の一つは、文の主語主体的原理の、細分、微分化された表現、また稀ならず、その近似値的かつぼかしの表現にある」⁴⁴。一肢人称文の階層性は、この語彙・意味面の階層性に呼応した統語面における発現だというのである。

タルラーノフのいう代名詞群の階層性との呼応という主張の確かさについてはともかく、このいわば文型パラダイムの階梯（グラデーション）は、「人称文においてすら必ずしも一々主語を明示する必要を持たない古代ロシア語」（山口）という大きな背景の中でこそ形成されてきたものであり、そうであればこそ主語主体はますます自覚的意識から亡失され、言外化、暗示化された主語主体性という形で、その不定性は階層、階梯を成して機能的に異なる多様な一肢文種を成層させてきたといえるのではないか。結果として、具体的には上述で見たように、定人称文—（単数3人称）不定人称文—（複数3人称）不定人称文—普遍人称文（汎人称文）という一肢文の階層、階梯が完成して行くのである。この内単数3人称の不定人称文は早くに姿を消して行き、一方3人称複数の不定人称文自体も内的には現実の多用な場面、文脈に応じて多様な不定性を表し得る

⁴³ 同上 стр.66, 68

⁴⁴ 同上 стр.72-73—古代から現代に至るまで、人称表現の微妙なニュアンスの差は他言語に例を見ないほど振幅幅が広いとして、例えば次例等を挙げている：А кто оу кого иметь землю отимати..., ино воля того члка, оу кого старые грамоты (Псков, судн. гр.); Не сяди на прѣднѣимъ мѣстѣ, еда къто чьстьнѣи тебе бѣдетъ званѣихъ (Лук. XIV-8); Прркъ кто рече (Ип. л. 6681); Аше отъ нихъ къто коли сътвори съгрѣшение (Срезневский, Матер. для словаря); Повѣдаше нѣ о комъ епископѣ (Пат. син.); Н ѣди же отъ фарисеи рекоша имъ (Лук. VI-2); Иван Андреевич умер... с тоской на сердце, какую не дай бог испытывать кому-либо из нас (Тургенев, Три портрета); [Червяков] утерся платочком и...поглядел вокруг себя: не обеспокоил ли он кого-нибудь своим чиханьем? (Чехов, Смерть чин.) 等々。

から、これ自体も機能的には多階層性を内包する文種であるといえる。また、普遍人称文（汎人称文）は定、不定人称文と同一の構造基盤の上に特定ジャンルの中で次第に機能化してきたということになる。

したがって、印欧語の古層の記憶を残滓させて来たロシア語では、本来の形態的に動詞述語が人称指示を運命付けられているという形式の制約に関連して、pleonasm を排すべく主語主体の明示の必要度が減退し、長期に亘って無主語述語文が習慣化する中でこそ、動作行為への主語主体の積極的意識的な関わりの自覚が時の経過とともに混濁、亡失され、それが瀰漫化して行ったのではないか。動詞述語に組み込まれている人称指示機能の長期に亘る根強い自覚の存在、pleonasm の排斥、それに関連しての無主語述語文の習慣化、次いで動詞述語の人称指示機能の混濁化、主語主体の動作行為との隔絶化つまり客観化、一般化の進行、独立性の強化という過程である。ロシア語の話し手にとって常に言語意識の中に沈黙しているのは、行為の主体との関わりよりも行為あるいは事態そのものの客観的あり方である。すなわち、タルラーノフの言う主・述関係の客観化、一般化傾向であり、山口教授の「述語の相対的独立性の強化」なのである。したがって、上にいう階層性、階梯とは正にこの客観化、独立化のグラデーションであり、最大限の客観化は最も人称性の低い発話であり、逆に最も人称性が高い発話は最も客観性が低い、すなわち行為への主観的要素の介在が強いということになる。

さて、この客観化、独立性の強化を惹起したものは何か。勿論、基層の民族的、文化的な背景を想定することはできるが、言語面に直接的に発現する誘因は、古い動詞組織の再編であろう。古代ロシア語の原点が持っていた動詞組織の核心は、印欧語の古層を反映した高高いテンス・アスペクト融合組織であり、これはとりわけ過去時制において著しい。この組織は、基本的にはテンスを軸にしながらも、アスペクトの別も絡ませ組み合わせて両カテゴリーをいわば融合的に組織化したものであるが、ロシア語では両組織を切り離す方向に再編して行ったと思われる。しかもアスペクト意識の比重がテンス意識を凌駕する形で再編過程を辿ったのである。例えば過去時制でそれぞれにアスペクト的あるいはタクシシ的機能の弁別を担っていたアオリスト、インパーフェクト、プルパーフェクトは消滅、またパーフェクトが本来担ってきたアスペクト的機能は後景に退き、それらのアスペクトの意義は、新しい過去時制一般形となったかつてのパーフェクトの動詞基のアスペクト別変態が規則的に担うことになった。結果として、かつてのパーフェクト形（<-I-分詞形）は時制を、動詞基の変態はアスペクトの別を担うという、アスペクトとテンス組織の切り離しが起った。また人称指示機能を担う連辞を捨てた II

分詞起源過去時制形が成立した。しかもこの過去時制形の出自は、本来、時制指示機能というよりむしろアスペクト指示機能である。人称指示機能を失い簡略化された時制組織にアスペクト弁別のための動詞基操作を組み合わせれば、かつての膨大なアスペクト・テンス組織のどの意義も表すことができるようになった。ただし、かつてメシチャニーノフが述べたように、動詞のアクチオンス・アルトあるいはアスペクトは名詞語基の接辞化による意味派生に似て、統語的な範疇である以上に語彙的な範疇であるのだから⁴⁵、先ずアスペクト的接辞化操作が施された動詞語基の別（語彙組織の別）が第一義的であり、次いでその動詞語基に文法的要素たる時称語尾が付加される、ということになる。すなわち全体としてアスペクト組織が前面に躍り出て、動詞基自体のアスペクト別組織化が進展したことになる。

一方、時制組織と人称指示機能は、主観的原理に足場をおいた構造化のための最重要二大要素であるにも拘らず、それを放棄した組織化が進行して来た。別言すれば、ここにいう客観化、客観的性向を底流に持つ構造化が成層してきたのである。クリモフが、活格言語においては、テンスに対してアスペクトないしはアクチオンス・アルト（動作態）の形式の発達に優勢であることは再三指摘してきたところである：「アクチオンス・アルトが原理的に客観的な意味内容を持つものに対して、時制はむしろ主観的な位置づけを顕すことは、すでにだいぶ以前から注意が向けられて来たところである」。あるいはグフマンも、「動詞時制の主観性に対するアクチオンス・アルトの客観性は、全ての研究者の認めるところである」、と述べている⁴⁶。またヴントも、法 (mood) の主観性や時制の「相対性」に対するアクチオンス・アルトの「客観性」という指摘を行っている⁴⁷。山口巖教授は、アクチオンス・アルトが「客観的志向」を持つというのは、「意味上の目的語の立場から行為を見ようとする」ことであり、「意味上の目的語からすれば、行為が及びつつあるか、及んでしまっているか、及ぼそうとしているかなどの区別は、行為の起る相対的な時間よりもはるかに重大であると思われる」、と説明されている。上述のような、古い動詞組織の再編と一肢文の根強い凌駕は、正にここに言う客観化志向を反映させたものである。その意味でロシア語史には、内容類型学がいう一般的な言語進化の方向性（そういうものがあるとすれば）とは逆行するような「先祖がえり」（山口教授）現象が著しいことになる。

⁴⁵ И. И. Мещанинов, *Глагол*, Изд. АН СССР (Наука, Лен. отд.), 1949 (1982), стр.69 (80)

⁴⁶ クリモフ『新しい言語類型学 活格構造言語とは何か』三省堂、p.120 (Г. А. Климов, *Типология языков активного строя*, Наука, 1977, стр.145)

⁴⁷ 同上 p.120-121 (Г. А. Климов, *Типология языков активного строя*, Наука, 1977, стр.145-146)

直ちには受け容れ難いが、この点に関するタルラーノフの観点は独特である：「主語主体の意味を厳密に層状化させ細分化させた、一肢人称文内でのサブシステムの発生は、ロシア民族をして異民族文化に対し鷹揚かつ誠意 (opened and loyal) あらしめている『広い心』を持つロシア民族の精神的表象の幅と世界に対応したロシア語統語法の特質の発現でないはずがない。この特質の発生過程は歴史時代の開始期に遡り、新しい時代に完成される。この過程は、動詞形、代名詞、文法諸範疇の意味、それらの統語法、の分野に発生してきた全ての変化に関連しており、つまるところ、ロシア民族の精神活動の形式としての独自の世界観、世界認識によって決定されたものである」⁴⁸。

さて、以上の一肢人称文諸種とは異なるもう一つの一肢文である無人称 (述語) 文 (非人称文) の起源とその生成過程の問題である。ロシア語史家の間でも無人称文の起源については、大別してこれまで二つの議論、すなわち、無人称文の起源は二肢人称文である、あるいは逆に、無人称文を原点として人称文が派生してきた、という説の対立がある。そして、ニュアンスに差はあるものの二肢人称文に対する無人称文の二次的派生というのが大方の史家の結論であろう⁴⁹。ただし、シャフマトフは人称文を削減して無人称文を生成して行く過程を一般的歴史的事実と認定しながらも、本来的に二肢文に対する「無人称文が原初でないとする結論まではほど遠い。……例えば自然現象を表す無人称文が主語として、〈神〉〈女神〉〈神格〉を持つ人称文から発達した、と仮定することは勿論理論的には可能であろうけれども、印欧語にそのような状態を証明することは不可能である。第一、そのような文は何れにしる印欧祖語に遡るものであること、……第二に、この一肢文と並行して現れる古代インド語の *devo varshati* (神が雨降らす) のような二肢文が……一肢文と比べて確実に原古だと認定すること、はできないからである」と慎重であった⁵⁰。一方、メシチャニーノフは、*il pleut* 型の文について次のように述べる：「*il pleut* 型の人称動詞構造を持つ非人称文に関しては、これは……動詞自身の意味に隠れた主語主体を含んだ *дождь дождит* である。フランス語の *il fait froid* における人

⁴⁸ З. К. Тарпанов, *Становление типологии...*, стр.77 (本稿註 36 参照)

⁴⁹ ボテブニャは「神話的主体」の排除過程として無人称文を想定、「古来無主語文の数は主語文を削減することによって増大」している、というのがボテブニャの基本的立場；メイエも同様、*ŷei* (= *il pleut*) < *ο θεος ŷei* (= *le dieu, le genie pleut*) の過程を想定 (ホメロスでは *ŷei* はなく *ŷe δ' ἄρα Ζεύς*) ; ペシコフスキーも無人称文の二次的派生を主張：「無人称文は人称文から発生したのであって、その逆ではない」(A. A. Потебня, *Из записок по русской грамматике*, Том III, Просвещение, 1968, стр.322; A. Meillet, *Introduction a l'étude comparative des langues indo-européennes*, Librairie Hachette, p.244; A. M. Пешковский, *Русский синтаксис в научном освещении*, Учпедгиз, 1956, стр.344)

⁵⁰ A. A. Шахматов, *Синтаксис русского языка*, Учпедгиз, 1941, стр.88

称指標 *il* も容易に然るべき名詞の代用と解することができる： *le froid fait froid*」⁵¹。この同語反復的（トートロジック）なメシチャニーノフ構想は、当該問題に関する現代の構想に繋がるかもしれないという意味で興味深い。

例えば、ステパーノフの文型構想は無人称文のそもそもの起源の問題にも示唆を与えるものである。すなわち、印欧語を活格言語とする前提に立った上で、印欧語の古層が可能としたであろう文型とその文成分への名詞語彙嵌入（lexical entries）の相関性を検証していくと、その第5文型「不活性主体+動詞+不活性客体」（*Вода ломает дом*）の主語主体として想定される名詞語彙「水」「火」「風」等の嵌入可能性の検証が無人称文の起源問題に繋がって来るのである⁵²。ガムクレリゼ、イヴァノフ等が、名詞の活性と不活性類への二類別が「水」「火」等の名詞にまで及ぶとしてその語例を挙げる（例えば、活性の水 **ḥap*^{h1}> 古代インド *āpah* と不活性の水 **uot'ort*^{h1}> ヒッタイト *uatar*, 古英語 *wæter* の別、等々）のに対して、ステパーノフは、「水」「火」等々の語は本来的には不活性類に属するものであって、これらの語の二重性現象は後世の文化的性格からする再解釈過程の中で生じてきた二次的現象であり、言語の観点からすれば、本来的にはおそらく「水」「火」型の名詞はそれと不可分一体的である述語から分化してきた可能性が高く、しかもおそらくは活性名詞は活格述語から、不活性名詞は不活格述語からというように、別々の述語から抜け出してきた可能性があること、あるいはまた活性名詞は主体として述語から引き出され、不活性名詞は客体として述語から引き出されるという可能性（前の仮説の変種）、例えば、大体ロシア語の ①Гремит（無人称文）→ Гром гремит（гром 主体、活性）；②Служить → Службу служить；Делать → Дело делать（служба, дело 客体、不活性）等の派生過程が想定できる、と述べている。こうして、ステパーノフは、自然現象（*стихии*）や人間に本来的に具わっている潜在意識的な力（*человеческие стихии*）を表す「夢」「労働」「役務」「戦」等の名詞類が全ての印欧語で *figura etymologica* あるいは *paronomasia* 的な形で同語反復的結合句に入っており、それはあるときは無人称文の排除ないしは復元される主体であったり（*гром гремит*）、またあるときは客体であったり（*pugnā pugnare*）、さらにまたあるときは主体・客体つまり主格・対格の中和形（*работа работать*）であったりするケースを指摘している⁵³。こうした仮説にもし従うと

⁵¹ И. И. Мещанинов, *Члены предложения и части речи*, Наука, Лен. отд., 1978, стр.301-302

⁵² Ю. С. Степанов, *Индоевропейское предложение*, Наука, 1989, глава 1 (стр.10-68)

⁵³ 同上 стр.56-57—その他若干の同語反復例を拾っておく。排除・復元される主語主体の例： *вѣтръ* (活性) *вѣть*; Skt. *vāta* (不活性) *vāti* (=подутое дует 風が吹く); Lit. *Lietūs* (不活性) *lįja* (=поливное льет 雨が降る)。排除・復元される客体例： Lat. *pugnā pugnare* (戦いを戦う); *servitūtem servire* (=勤めを勤める); *somnium somniare* (=夢を夢見る); *vitam vivere* (=生を生きる); Gr. *νίκην νικᾶν* (=勝利を勝利す

すれば、無人称文の中には、少数派であるとはいえ、原理的には二肢文を原点とせず無人称述語の一肢文を原点とする文型に遡及する文種があったとしても不思議ではなからう。ロシア語史における単項構造動詞無人称文 (безличные предложения однокомпонентной структуры) つまり無人称動詞以外の如何なる文成分をも持たない絶対無人称文は、ゲオルギエヴァによれば、文献初期から17世紀末に至るまで極めて僅少に過ぎず、少数の例外を除いて印欧語から引き継いだ分野である自然現象を表す動詞、例えば *смерчеся* (原初年代記) に限られており、*свѣт-* を語根とする無人称動詞構文は後世になって初めて現れるものであるという：*освело* (ニコン年代記)；*россветало* (アヴァーム伝)。また初期には、人称自動詞の無人称的用法も限られた範囲のものであった：*погремъ* (原初年代記、スズダリ年代記) 等⁵⁴。つまりロシア語史は歴史時代に入る頃にはすでに印欧語の古層の無人称動詞の姿を留めていないのであるから、ロシア語史家の無人称文の原点を巡る論争はロシア語史の範囲内では解決不能である。本稿の課題はロシア語史における無人称文の変遷過程であるから、この論争については以上の紹介に留めておきたい。

さて、ロシア語史である。上述の大方の史家の主張のように、ロシア語史の大きな流れは二肢文から一肢無人称文へ、である。二肢文を削ってそこから一肢無人称文を派生させて来たことは諸資料の事実が立証している。他動詞、自動詞文、また形容詞述語文、分詞述語文を問わず、つまりロシア語史は、二肢文たる動詞文からも名辞文からもひたすら述語成分の「絶対化」(タルラーノフ) を推し進めてきたのである。この点で発達傾向自体は、上述の二肢文からの一肢人称文の分化過程と分母を同じくする。

例えばスプリンチャクは、古い人称文からその文法的主語を排除することによって、新しい無人称文タイプを生成、拡張してくる一例を示している⁵⁵。それは、①かつて主語であった名詞の述語副詞化 (状態範疇 категория состояния の拡張) 過程 (нужа, пора, неволя, лъзя, вермя, треба 等)：例えば、人称文 и рѣша кыяне: «намъ неволя» (Лавр. лет.) 「『我等には如何ともし難い状態がある(仕方がありません)』とキエフの人々は言った」から無人称文 неволя ми было пристати въ свѣтъ (同) 「陰謀に加担するは吾が意志にあらず(私は陰謀に已むなく加担せざるを得なかった)」への、すなわち名詞から述語副詞に至る微妙な過程；人称文 кая лъзя (名詞) есть (Пандекты Антиоха XI в.) 「何か利得(効

る)；Skt. *tapas taruāmahe* (=節制を節制する) 等々。

⁵⁴ *Ист. гр. рус. яз., Синтаксис, Прост. пред.*, Наука, 1978, стр.230-231

⁵⁵ Я. А. Спринчак, *Очерк...*, стр.91-93

用)ありや」と否定辞を付加して残る無人称文の形式 *не бяше льзѣ* (<льзя 所格⁵⁶) *коня напоити* (Лавр. лет.)「馬に水を飲ませるは易からず(飲ませることはできなかった)」; 人称文 *а коли поѣдешь из Новгорода, тогда даръ не надобѣ* (<на+доба 所格⁵⁷) (Новг. гр. 1304-1305)「汝ノヴゴロドより発つとき、納税は不要」と無人称文 *самъ твориль, что было надобѣ*「必要なことは自分でやった」、②存在否定無人称文の一般化過程: cf.古語では存在否定人称文 *ино помышление въ сердци моемъ не было* (Лавр. лет.)「私の心には別の考えはありませんでした」が存在し得た、③数詞+名詞結合群主語の補語化による無人称文生成過程: *Та пять лѣтъ минула* > *Пять лет минуло*; *Кыянь одианехъ изгыбло* на полку томъ десять тысяч (Лавр. лет.)「その戦闘でキエフ人だけで一万人が亡くなった」等である。このように、数量語結合群が表す主語と述語の一致(呼応)の崩壊、すなわち二肢不一致文の生成と無人称文化過程は相互に混ざり合って密接に関わる過渡的な過程と思われる。この過程はすでに古スラヴ語期にも見える: *пять же бѣ* отъ нихъ боуи и пять мѣдръ (Мар. св.; cf. бѣша)「彼の者のうち5人は思慮浅く、5人は思慮深かった」; и слышавше *десять начаша* негодовати (Остр. св.)「十人の者は(これを)聞いて憤慨し出した」。また、受動過去分詞による無人称文の生成にも、二肢不一致文との接点が感得される: *И посѣчено от безбожного Мамая полпретья ста тысячъ и три тысячи* (Задонщ.)「冒流邪教のマイによって25万5千人が斬り殺された」。

以上のように、無人称文の陳述核となる述語要素によって、無人称文の構造的・意味的タイプは多様であるが、歴史的にはこれらの構成比やその内実は変化して来ている。少なくとも文献出現期には、例えば本来的に無人称動詞であるものは限られており、歴史的にはむしろ人称動詞の無人称的再解釈によってその幅を拡大し、また他の語詞についても概して主語との関係を排除して、二肢人称文から一肢無人称文を生成拡張してきた、と思われる。

⁵⁶ ファスマーは与格とする (*Этимологический словарь русского языка*, Том III, *нельзя* の項)。Льзя (*lǝdz'a) <льга (*lǝga)「軽いこと、易いこと、可能性、利得」は第三次口蓋化の結果であり、語根 *lǝg- は、古代インド *laghú-*, *raghú*「軽い、取るに足らない」、ラテン *levis*「軽い」<*lǝgʰu-, リトアニア *leĩgvas*「軽い、容易な」<*lǝngʰu-, 等々に見える。ロシア語 *лѣгкий*, *легко* (light) <古代ロシア語 *льгъ-къ-и*, *льгъ-к-о* や *льгота*, *польза* 等も同語根派生 (cf. А. И. Соболевский, *Лекции по истории русского языка*, Изд. Четверг., стр.87; *Этимологический словарь славянских языков* (под ред. О. Н. Трубачев), том 17, Наука, 1990, стр.64, 69, 109; П. Я. Черных, *Историко-этимологический словарь русского языка*, том 1, Русский язык, 1993, стр.472, 588; G. Y. Shevelov, *A prehistory of Slavic*, Carl Winter, 1964, p.594 他)。

⁵⁷ スラヴ語語根 *doba「時期、時機」(cf. ブルガリア *дова*, チェコ *doba*, ポーランド *doba*「一昼夜」等) <印欧語根 *dhabh-「相応しい、適する、都合のよい」。на добѣ の原義は「時機だ、好機だ」の意。ロシア語 *надо*, *удобный*, *добрый* の語根も同じ。したがって、*dobrejъ の原義も「適する、相応しい、良質の、保ちのよい」。

何れにせよ、全体として、動詞、不定詞、受動分詞、述語副詞類を構造核とする文が次第に無人称文として集合していく様が観察されるのである。そして何れも、概して、主語主体の意志とは関わりなき、つまり不随意の行為・状態を表す文の分野であって、内容類型学が示す結論からしても、すなわち不随意行為・状態動詞の文を通常の行為動詞文、状態動詞文とは分立させて構造化する古今の言語の存在と対比しても、この分野の集合を特色とするロシア語史の無人称文拡張過程は興味深い。

タルラーノフによれば、ロシア語史における無人称文の発達過程の大きな流れを辿れば、以下のようになるという⁵⁸。

1) 10世紀から13世紀末14世紀初めまで。無人称文の組織的機能化と発展面で閉鎖的であり、量的にもまた述語の形態的所屬面でも貧弱である。「無人称文はこの時期の統語組織においては、いわば閉鎖的な極小域に絞られる周辺的なものであった」⁵⁹。要するに、無人称文を派生させる無人称述語類の生産性が低く、またその範囲が狭く未組織で構造的に未確定なのである。この時期最も普及した文は **быти** 動詞（単独であれ状況語による拡大された場合であれ）あるいはいわゆる状態範疇 (*категория состояния*) が陳述核になる無人称文であるという：Како **было** при дедѣ твоємъ и при отци твоємъ Ярославѣ (Гр. Велик. Новг. и Пск. 大ノヴゴロド・プスコフ諸文書)「汝の祖父ならびに汝の父ヤロスラフの御世にあった(行われた)如く」；Аще ли хочеши гнѣвъ имѣти и погубити градъ, то вѣси, яко нама **жалъ** огня стола (原初年代記)「もし汝が怒り抱きて町を滅ぼさんとするとき、われら二人父の座を大切に思うこと汝知りたまえ」；И поидуть же Русь домови, да емлютъ оу церя вашего на путь брашно, и яеоря, и оружица, и прѣ, и елико **надобѣ** (同)「また(ルシ人が)ルシに帰還するとき、彼らをして糧秣も錨も綱も帆も必要とする限りの量を汝らの皇帝より受け取らしめよ」；не бѣ **лзѣ** Володимеру помочи, не бѣ бо вои оу него (同)「ヴラヂミルは助けることができなかつた。彼は軍勢がなかつたからである」。また、ゲオルギエヴァの記述は、この期に見られる無人称文の構造幅が、少数の単項動詞無人称文(смерчеся [同、スズダリ年代記] たそがれた)、не мочи ся 構文(мнѣ ся не можется [ノヴゴロド白樺文書] 私は体の具合がよくない)、増減動詞無人称文(Ту кровавого вина не доста [イーゴリ軍記] かくて血潮の酒の尽き果てぬ)、状況語付き **быти** 無人称文(Бѣ же въ святоую неделю [Сказ. о Б. и Г. Борисとグレ

⁵⁸ З. К. Тарланов, *Становление типологии русского предложения...*, Петрозав. гос. ун., 1999, стр.91-100

⁵⁹ 同上 стр.92

ープ物語] 日曜日のことであった) である、ことを示している⁶⁰。

2) 14-16世紀。旧来の構造枠を突破して二肢文を削って無人称文を発生させ、構造的機能的に無人称文を活発に拡張させて行く時期であり、これまで存在したタイプの無人称述語類の「単純再生産」から新しい述語類を補給して無人称述語類の「拡大再生産」過程へ移行する時期である。この期その拡大再生産の基盤を支え始めた述語類の内最も重要な述語類は、第一には無人称的に転用される人称動詞類の大量増加であり、第二に接辞化して組織性、機能性を増した *ся* 動詞であった: *А нынѣ покаитесь того беззакония. А на то дѣло оканѣное немного поводить.* (ノヴゴロド白樺文書 14世紀)「今やその不道徳を悔改めなさい。その呪わしき事に少数の者が引き込まれていますが」; *И той же осени бысть вода велика и выломи ледом ночь мержею у великого мосту 7 городѣнь* (ノヴゴロド第一年代記考古委員会本)「同年秋水かさが増し、大橋の七つの橋脚が夜間に凍結した水中の氷に打ち砕かれた」; *в Новѣгородѣ много города подняло...иконѣ и книгъ много потопи* (プスコフ第一年代記)「ノヴゴロドでは多くの都市が冠水し、…イコンや書籍が多数水浸しになった」; *никому невѣрно да не мнитя о нихъ* (ボリスとグレーブ読本 14世紀)「誰もが彼らのことを誤って想い描くことがなきよう」⁶¹、等々。

3) 16-17世紀。形容詞短語尾形と受動過去分詞を述語とする二肢文において、それぞれの述語類を主語主体から切り離して「絶対化」する過程が活発化した時期であり、それらの述語類が無人称文の拡大再生産の基盤となった。

短語尾形容詞の述語副詞化過程は歴史時代の初めにすでに始まっていたが、生きた統語傾向となるのは16-17世紀末である。この期には、形容詞の短、長語尾の機能分化が鮮明になり、長語尾は真の形容詞へ向けて発達していく一方で、短語尾は益々形容詞の特徴を失って状態動詞化していった。17世紀の俚諺集には二肢形容詞述語文の述語としての長語尾形は、一般に認められないという⁶²。このいわば状態動詞化した短語尾述語形がデフォルメして、主語との関係を薄め、絶対化つまり無人称述語化(述語副詞あるいはいわゆる状態範疇 *категория состояния* を拡大再生産)していく過程が活発化し、さらにまたその語彙類を拡張して行った(例えば *надобѣ* でなく *нужно* へ、*лѣпо* でなく

⁶⁰ *Ист. гр. рус. яз., Синтаксис, Прост. пред.*, Наука, 1978, стр.230-247 — 再帰動詞+与格型の不随意行為・状態動詞が *не мочи ся* の枠を超えて発達して行く端緒となるのは16世紀、広い発達を示すのは17世紀以後であるという(стр.241-242)。

⁶¹ З. К. Тарланов, *Становление титологии...*, стр.95; 前註参照。心理的性向を表す-*ся* 動詞と様態状況語の結合文は、16-17世紀には *видетися, казатися* の他 *слышатися, чуютися, почюдитися, помнитися* 等、全体として不随意行為の-*ся* 動詞語彙素を拡張して行った(*Ист. гр. рус. яз., Синтаксис, Прост. пред.*, Наука, 1978, стр.253-254)。

⁶² 同上 стр.97

хорошо や добро のように) : Нужно бо есть побеседовати и о вочеловечении бога-слова к вашему спасению (アヴァクーム自伝)「あなた方の救いのために神性ロゴス(三位一体としてのキリスト)の受肉(仮現)についても語らねばなりません」⁶³; Хорошо мне жить с собаками да свиньями в конурах (同)「私は犬小屋で犬や豚どもと暮らすのが好い」; И тот исток приквасит добре, хорошо семье пити (ドモストロイ)「そのビール槽がよく発酵してきたら、家族で飲むのが良い」; Грустно гораздо, да душе добро: не пеняю уже на бога вдругорят (アヴァクーム自伝)「ひどく惨めな状態でしたが、気分は爽快でした。もはや今度は神に愚痴を申さなかったからです」; А в Гиляни душно велмина парише лихо, да в Шамахѣ парь лих; да в Вавилоне варно, а в Люпѣ не так варно (アフナーシー・ニキーチン三洋旅行記)「ギリヤンでは大変蒸し暑く、猛烈な炎暑であり、またシャマハも酷暑、またヴァヴィロンも暑いが、アレppo (ハレブ) はそれほど暑くない」、等々。

受動過去分詞の場合も、形容詞短語尾述語と同様の理由で述語の絶対化と語彙類の拡張過程が進行した。ゲオルギエヴァによれば、古代ロシア期(11-14世紀)には、受動分詞無人称文は、全体として他の無人称文に比して極めて控えめである。また、分詞の基になる動詞が他動詞か非他動詞かという点から見ると、非他動詞(間接他動詞)派生の分詞の例は、古代期には「ロシア法典」の一例のみであるという: А за жеребець, оже не въсѣдано на нь, то гривна коунь「種馬に対しては、それに乗っていない場合は1グリヴナ・クン(の賠償金を支払うべし)」⁶⁴。したがって、他動詞派生の分詞文が大多数であるが、それも構造・意味的には限られており、典型的には яко [так]о писано [повелѣно, уставлено]のような定形句においてであった: То было въ ты рати и въ ты плъкы, а сицен рати не слышано (イーゴリ軍記)「これぞかの戦、かの遠征のさまなり、されどこの度の戦は前代未聞」; Паче же слышано ему бѣ всегда о благовѣрнѣи земли гречѣстѣи (イラリオン「律法と恩寵の話」)「彼には常日頃、グレキの敬虔なる地については十分に噂に聞こえていた」。ところが、中世ロシア語(15-17世紀)では、非他動詞(間接他動詞)派生の受動過去分詞文が広がって行く: а уже заехано, ино было не по объездному спати (イヴァン雷帝書簡)「一旦出発してしまうと、安心して眠れなかった」; А ведаешъ и самъ, что не богатствомъ жито з добрыми людми – правдою да ласкою, да любовию, а не

⁶³ 現代語に頻用する нужно は、本来的には тяжело, мучительно, невыносимо の意であり、現代語 нужно の意では надобѣ 等が使われ、現代語の意での нужно が現れるのはようやくアヴァクームにおいてであるという (cf. *Ист. гр. рус. яз., Синтаксис, Прост. пред.*, Наука, 1978, стр.265, 271)。

cf. Видѣхъ злато на женѣ злообразне и рекохъ еи: нужно есть злату сему (捕囚ダニールの祈り)「私は醜女に金飾りを見て、彼女に、『この金飾りが極まり悪そう(辛そう)』と言った」

⁶⁴ *Ист. гр. рус. яз.*..., стр.285

гордостию, и безо всякия лжи (ドモストロイ)「富を以つて善良な人々と暮らしてきたのでないこと、傲慢さでなくまた如何なる虚偽もなく、公正と厚意と愛情によって暮らしてきたことは、汝自ら知っていることだ」; 少数ながら再帰動詞派生の受動分詞も認められる: А многи были чмуты и бражники, и со всеми теми мастера в сорок лет, дал Бог, разлезенся без остуды, и без пристава, и безо всякия кручины (ドモストロイ)「ペテン師や酔っ払いも多数いたが、神が与え給うた40年間それら職人たち全員と争いごともしこさずまた監督官も置かず如何なる悲しみ事もなく過ごせたのです」。しかし勿論、それ以上に他動詞派生の受動過去分詞無人称文は益々語彙類を拡張して広がって行った: А по правилу мирянину двоеженцу до урочна времени въ церковь не входити, а троеженцу наипаче запрещено (百条集)「また規則に従い、世俗の重婚者は決められた時間まで教会に入つてはならず、とりわけ三重婚者の入場は禁止される」; 以上の他、場所や様態の状況語成分を備えた多様な他動詞語彙が認められる: Всего пересмотрети самому, по тому чину оустроино, как в сей памяти писано (ドモストロイ) この書に記されている規律に則つてきちんと整えられているかどうかを、万事自身で検証しなければならない」; А всегда бы были всякие хоромы чисто метены,.....А на дворе и перед воротаы всегда после снегу сгребено, и свожено, и сметено (同)「また如何なるお邸であれ常に清潔に掃除されて然るべきだろう…また庭や門前は積雪後常に雪掻きがなされ、一箇所に運び掃き寄せられているべきだろう」; Двери не отворялись, а ево не стало! Дивно только человекъ, а что же ангель? Ино нъчему дивитца – вездѣ ему не загорожено (アヴァクーム自伝)「扉は開いていないのに、その者はいなくなりました。人間だとしたら不思議ですが、天使だとしたらどうでしょう。それなら何も怪しむに足りません。天使はどこであれ通行後免ですから ([通路を] 塞がれていませんから)」、等々。

こうして古代ロシア期初期には組織性を持たず狭い範囲の語彙類に限られていた無人称述語は、人称動詞の無人称的転用、無人称 -ся 動詞の増加(14-15世紀以後)によって、次いで形容詞短語尾あるいは受動過去分詞からの無人称述語の大量補給(16-17世紀)も加わって、これら全ての述語成分が絶対化、独立化へ向けて集合して行った。したがって、ロシア語史の主流はやはり、少なくとも歴史時代に関する限り、二肢文を原点として一肢無人称文を派生させてきたという大方の結論は正当であろう。

ではこうした過程を惹起した原因は何か。大きな背景としては、動詞のアスペクト・テンス体系の再編による動詞組織における人称表現の意義の希薄化があるであろう。また文法組織面での最大の要因は中世以後における相(залог, voice)の形態範疇の生成の

結果である、すなわち *-ся* の代名詞から接辞への転換によって動詞組織全体を包括的に再編せしめた再帰動詞の活発な組織化、機能化である。なぜならば、「再帰動詞の最も重要な意味特徴のひとつは、それが表す行為は状態の面に転換されることである。無人称文は何よりも先ず行為を状態として表すのであるから、再帰動詞はかつてないほど状態のための自然な語彙・形態的展望を広げるのである：再帰動詞の範疇的・語彙的意義全般が、無人称文の統語的意味全般に類質同形的 *isomorphic* なのである」⁶⁵。第二に、やはり中世期から短語尾形容詞の述語専用化から派生してくるその中性形を補給先とする述語副詞、状態範疇 (категория состояния) の生成が、古代期に存在した旧来の状態範疇の枠 (не лга, не лзь, жаль, надобь 等の枠) を超えて急速、活発に進行したことである。

最後に独立不定詞無人称文について触れておきたい。この不定詞文は、中世後半から活発化してくる上述の他の一肢文とは異なって、古代ロシア期の初めにすでに完成していた文種であって、年代記、法典等公文書、白樺文書等最古諸文献に広く認められる。例えば、イラリオン「律法と恩寵の話」(11世紀)においてヴラヂミル公を称える一文：приде на нь посѣщение Вышняго, призири на нь всемилоостивое око благаго Бога, и всьна разумь въ сердци его, яко разумѣти суету идольскыи льсти и взыскати единого Бога, сътворившааго всю тварь видимую и невидимую「至高なる神、彼の者(ヴラヂミル)を訪ない、大慈大悲の神の慈眼彼の者を見給うや、彼の者の心に、偶像崇拜の誘いの虚しきを悟るべく、また可視不可視の万物の造物主たる唯一神を求めべく、理知の光明の輝けり」。この不定詞には、彼の者自身が意志的に「悟り」「求め」ようとするのではなく、自ずから必然的に悟りと求道の境地に達するように導かれた、という意図が込められていると思われる。事態進行の客観的道理、宿命、したがって不随意性である。

タルラーノフによれば、最古文献における不定詞文には、中世以後後世のそれとは異なって、特にそれが従属複文の従節(上例)あるいは対話的文環境に現れるという重要な特徴があるという：и рече ему кудесникъ один, «кнже, конь егоже любииши и ѣздиши на нем, от того ти оумрети»(原初年代記)「一人の妖術師が言った：『公よ、あなたが可愛がり乗っている馬ですよ、あなたはそれがもとで死ぬのですよ』。ただし、必ずしもこの条件がなければ不定詞文が不可であるということにはならず、例えば「イーゴリ軍記」

⁶⁵ З. К. Тарланов, *Становление типологии...*, стр.101

における重要な九場面での不定詞文が指摘される⁶⁶：Начати же ся тьи пѣсни по былинамъ сего времени, а не по замышлению Бояню!「その歌はボヤーンの想念に由らずして、自ずと今世の事実に従いて始むらむ」；Быти грому великому, ийти дождю стрѣлами съ Дону великого! Tu ся копиемъ приламатн, ту ся саблямъ потручяти о шеломы Половецкыя, на рѣцѣ на Каялѣ, у Дону Великого「大いなるいかづち（雷）の轟きて、兩大河ドンより矢の如く降り注がむ。ここかしこ槍折れ太刀ポーロヴェツの兜に撃ち砕けむ、大河ドンのカヤラ河畔に」；а Игорева храбраго плъку не крѣсити（2回）「なれどイーゴリの武士軍陣を蘇らす術もなし」；Уже намъ своихъ милыхъ ладъ ни мычлино смыслити, ни дуемоу сдумати, ни очима сглядати, а злата и серебра ни мало того потрепати!「もはや吾ら夫（つま）のこと心に思いやるも思い描くも逢い見（まみ）ゆることも能わず、まいて黄金（こがね）銀（しろがね）寸分触れるだに叶わず」；Ни хытру, ни горазду, ни птицю горазду суда божна не минути!「如何に老獪なる者も狡知に長けたる者もはたまた狡知なる鳥といえども神の裁きを通る術はなし」⁶⁷；О, стонати Рускои земли, помянувшѣ прѣвую годину и прѣвыхъ князеи!「ありし世とありし公等を偲びて、ああるしの地は愁訴呻吟せむ」；князю Игорю не быть!⁶⁸「イーゴリ公留まるべきに非ず」；Пѣвшѣ пѣснь старымъ княземъ, а потомъ молодымъ пѣти!「古の公等に凱歌挙げしからには、若き公等にも凱歌奏すは当然」。

同論者によれば、これら不定詞文は全て叙事の客観性と叙事に勇壮さを付与する機能を負っており、導入部の叙情性豊かな響きがこの統語的操作によって民族とその歴史全般に及ぶ客観的事実に「変換、改鑄されている」、と述べている⁶⁹。特に言語と精神文化的側面との関連に傾注するアンナ・ヴェジビツカヤは、ロシア語不定詞文に見られるテーマは全て主体による行為・状態の「非制御性 неконтролируемость」だとし、ロシア文法は世界を人間の願望や意志性に対立するものとして表象するのに対して、英文法では事態の「作因 каузация が人間の意志に肯定的に関わっている」、と解釈しているという⁷⁰。

⁶⁶ 同上 стр.110

⁶⁷ птицю горазду に古代ローマの鳥占官 (augur) が行なう鳥占いを想定している研究者もあるという (cf. *Слово о полку Игореве*, составление и подготовка текстов, примечания Л. А. Дмитриева и Д. С. Лихачева, Сов. писатель, Ленингр. отд., 1967, стр.518)。

⁶⁸ бытиではなく быть 語尾の不定詞形について、オブノルスキーはこの一箇所だけであることを指摘し、この語尾はテキストの損傷によるものと見なすべきだ、という解説を行なっている (cf. С. П. Обнорский, *Очерки по истории русского литературного языка*, Изд. АН СССР, 1946, стр.158)。

⁶⁹ Э. К. Тарланов, *Становление...*, стр.110-111

⁷⁰ 同上 стр.111 (←А.Вежбицкая, *Культура, Познание*, стр.55)。ただし、タルラーノフ自身の「民族哲理」についての観念的解釈にも与することはできない。ヴェジビツカヤの「非制御性」の方がよほど事態を言い当てているように思われる。註36, 73 参照。

タルラーノフは、こうした解釈が恣意的で、ヨーロッパ中心的なドグマ感覚による評価であると批判した上で、「ロシア語統語法は、主観的原理が支配的で統語法自体が自己中心的である英語と比べると、しかるべき内容をより客観化された形で客観的に提示するのである。この点にこそこれら言語の統語法が表す民族哲理間の違いがある。……不定詞文の主たる統語的意味は、客観的モダリティーの実現であり、このことは『イーゴリ軍記』のテキストにすでに鮮明かつ一義的に追跡される」、と述べている。ゲオルギエヴァも、11-14世紀の古代ロシア語が持っていた独立不定詞文の叙想的意義として、行為遂行の当為性、可能・不可能性そして客観的定め (объективная заданность) の意義の三群を挙げ、さらにこの客観的定めの内容として不可避な事態、余儀なき事態、不測の事態のようなニュアンスを分類しているが⁷¹、当為性も可能・不可能性も主体の自発性に発するそれでないことを考えれば、このこともまた独立不定詞文の全体的な意義が「客観性」モダリティーの意義だという指摘を裏付けるものである。

むすび

タルラーノフは、二肢人称文から一肢人称文の発展と後者の層状化、階層化の過程も含めて、無人称文生成過程においてこれら大量に現れて来る多様な述語の主語主体からの絶対化、独立化、また客観化の基盤、したがって二肢文の一肢文化の底流にある動因を、ロシア語史全体にパラタクス体制からヒポタクス体制へ変換せしめる強力な駆流が働いたことを指摘している：「無人称文の発展、量的増大、構造的広がり、他の一肢文型のそれと同じであるが、パラタクス体制を断ち切り克服してヒポタクス体制を推し進めて行く信号である」。また「ヒポタクスの機能的任務は、思考の構成素における論理的な主従関係をその思考構造に適した統語形式、つまり階層的に組み立てた然るべき統語形式に具現化する点にある」から、無人称文も他の一肢文の文型もそのヒポタクス統語法を反映して、「そのレーマ成分項を発話の中心に引き出す」効果を持つ、「アーカイックなパラタクスの発話のうわべだけの多中心体制 мнимый полицентризм、すなわち無中心体制 ацентризм に基礎を置く表層のバランスは、このヒポタクス統語法によってこそ崩されるのである」、と主張している⁷²。すなわちパラタクス体制は主・述の均一的、単調的な配置である二肢文が相応しく、そこには抑揚がなく、これは中世末期以後台頭してくるロシア民族精神には異質の統語法である、と。そこで、こうした統語法の転換の

⁷¹ Ист. гр. рус. яз., Синтаксис, Прост. пред., 1978, стр.278-279

⁷² 同上 стр.93

精神文化的背景について極めて観念的な解釈を与えている⁷³。これに与することはできないが、本稿筆者にも、ロシア語が文成分の語順よりテーマ・レーマ語順に重点を置く言語であるという印象や、また音の流れにおいても、例えば中世末期以後急速に発達してくるア弁（аканье）に見られるように、ロシア語が音にも統語法にも強弱交替の対照による効果を実現する言語である、という感触はある。統語法におけるレーマの重点化とヒポタクス体制の強化の連関性についての同論者の主張は、その意味で肯ずることができるのである。

⁷³ 同上 стр.104：具体的な人称とか行為者からの行為の切り離しを「行為の抽象的表象のための」ロシア民族語の新しい可能性と捉える観点からであろうか（同 p.101）、「中世末期からロシア語を特徴づけている極めて豊かな無人称統語法は、明らかに、『呪うべき日常』からの抽象化志向、個々物の理想化癖、靈感、未来信仰、ひよっとしたらという願望崇拜、神秘主義に対する忠誠、を含むロシア民族精神の現れの一つと見ない訳には行かない。実体とは無関係な抽象的特徴が、言語ゆえにまるで内在本質を獲得するかのごとく、独自価値を持つものに交換されるがごとくである。このことから、ロシア民族精神は、神秘性志向を失っておらず、したがって信じやすく、かつ言語を含むあらゆる精神活動の産物と同じく感じやすい」、という。こうしたロシア語研究の傾向については、註 36 も参照。